
『**廃人無職青年成敗物語**』

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『廃人無職青年成敗物語』

【Nコード】

N0560M

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

統合失調症ニート前科者・廃人無職青年こと、谷垣直人。邪悪な性格を持ち、民自党の工員でもある谷垣に今、天誅が加えられようとしていた。東京都青少年健全育成条例改正問題に関する発言やエヴァはつまらん発言を問題視した三人のニート、近藤春雄、箕輪晴子、河村英樹が谷垣の襲撃計画を練る。ひとり悦に浸る悪魔ゼパル。谷垣の運命はいかに？

今、ニート対ニートの戦いが幕を開ける。

第一章 廃人無職青年、自身の終わりを確信する

アミーバブログ「廃人ニートは小説を書けるか？」管理人・廃人無職青年こと、谷垣直人は気分が悪かった。かつて自分が迷惑をかけたサイトにアクセスしてしまったのだ。谷垣は統合失調症を患い、暴行事件を起こして逮捕・精神科に強制措置入院させられた過去をもつニートである。ブログではあまりほめられた出来ではない小説を五作、発表していた。

（何でアクセスしてしまったのか。また色々と言われるじゃないか）

谷垣はかつて、そのサイトの管理人のことを自分のホームページで執拗に誹謗中傷するだけでなく、URLとメールアドレスだけでなく、リンク先も晒していた。関係のない人に誹謗中傷メールを送って回ったりした。

2

谷垣の頭に、悪い妄想が次々と浮かんだ。ブログの閉鎖、パソコンの没収、精神科への入院。

（もう俺は終わりだ）

谷垣はなぜか自分の人生がその被害者によって終了させられるような確信を抱いていた。終わるとなると、不思議に谷垣の気持ちはふっきれた。

（終わりだ。終わり。・・・・・・くくくくくくくく

くくくくくく、はははははははははははは。そうだ。終わるなら、終わればいい。俺の人生は糞だ。母親は統合失調症で人に迷惑をか

マクドナルドに三人の人間がテーブルを囲んでいた。

「この廃人無職青年という男、まだ悪事を隠していたか。まだまだ隠しているのかもしれないのである。やはり、この男、天誅を加える他はないのである」

近藤春雄が携帯電話を覗き込んで言った。画面には、廃人無職青年のブログが映し出されていた。近藤は大学中退のニートである。

「そうですね。こいつはそれだけでなく、暴行の前科もありますし、統失という本物のキチガイです。危険極まりないでしょう。野放しにすることなんて、できないですよ」

箕輪晴子が口をとがらせている。箕輪は高卒のニートである。

「だな。俺もこいつがここまで悪党だとは、思わなかったぜ」

ヘルメットのようなマスクをつけた男、河村英樹が言った。河村もご多分にもれずニートであった。河村は廃人無職青年とはちよつとした知り合いで、メッセのやりとりをしたこともあった。

近藤、箕輪、河村の三人は、かつてある事件とともに戦った戦友同士であった。そのときの戦いにはもうひとり参加していたのだが、今日は一緒ではなかった。

「東京都青少年健全育成条例改正に積極的に反対しないばかりか、反対運動を冷笑するような発言をしたり、エヴァをつまらんと切っ捨てたり……そんな人間は、悪人に決まっているのである」

る」

近藤は険しい表情である。近藤と箕輪は、それらの発言から、廃人無職青年を条例改正案推進派の破壊工作員であり、日本アニメ失墜を計画していると睨み、廃人無職青年を懲罰しようと考えた。今日は廃人無職青年と知り合いの河村に、廃人無職青年を呼び出し、襲撃しようという作戦会議の日であった。

「で、何て呼び出せばいいんだ？」

「漫画やアニメのことでざっくばらんに話したいとでも言えばいいのである」

「あー、それでいいんじゃないですか」

「うん。俺もそう思う」

「それでは、今すぐ連絡を取るのである」

「今すぐ？ 急な話だな」

「ことは一刻を争うのである。こうしている間にも、廃人は破壊工作を進め、着々と日本アニメを滅亡せしめようとしているのである。さあ、早く！」

近藤が河村をせかした。河村は携帯電話を取り出し、廃人無職青年のブログにアクセスした。

廃人無職青年 谷垣直人の身に、危険が迫ろうとしていた。
しかし、谷垣はそうとは知らず、むしゃくしゃしながらキーボード
を叩くのに忙しかった。

第二章 廃人無職青年スケベ伝説

谷垣は自分のブログのコメント欄に寄せられた河村のコメントを読んでいた。

「今度、会って話さないか？ アニメや漫画について、熱く語ろうぜ！ な、いいだろ？」

（別にあって話すようなことはないな）

谷垣は返事をしたためる。

せっかくのお誘いなのですが、人見知りな性格でして。そんなに話好きというわけでもないですし。お誘い、ありがとございしました。そして、すみません。

（こんなんでもいいだろ）

谷垣はブログにアップする記事を書き始めた。最近を書くネタに困り気味で、以前はなかったアニメの感想カテゴリーを新たに追加し、毎日見たアニメの感想を書いていた。今日は今さっき見た「いちばんうしろの大魔王」最終回の感想である。このアニメは、ファンタジーコメディアニメとも言うべきもので、将来魔王になると予

言された少年が主人公であった。

「おい、こいつなんか断ってきたぜ」

まだマクドナルドで作戦会議に参加中である河村が、谷垣の返信を読んで面食らっていた。

「どうするよ?」

河村は近藤と箕輪を顔色を窺った。

「何度でもアタックするのである！ 何としても誘い出すのである！ 破壊工員ひとりを滅することは、日本アニメの将来に明るい兆しをもたらすこと、間違いなしなのである！ 絶対にこの作戦は完遂しなければならぬのである！ それなのに、序盤の序盤で躓いくわけにはいかないのである！ む！ 春雄はいいことを思いついたのである」

近藤が笑顔を浮かべた。

「何ですか、それ？」

箕輪が興味を示す。

谷垣は感想を書き終えた。再び河村のコメントが付いている。

「そう言うなよ、廃人無職さん。とっておきのネタ、教えるぜ。なんと、俺の知り合いの美人の女子も一緒に連れていきます！俺が廃人無職さんのこと話したら、是非会わせてくれって言ってきかないんだ。美人だぜ、美人。廃人無職さんも会いたくねえか？どうだ？」

（美人だと？）

即座に谷垣の食指が動く。谷垣は無類の面食いで、美醜にうるさく、こだわる男であった。谷垣の指が素早くキーボードを叩く。

へえ、美人ですか。例えばですが、有名人で言えば誰に似てますかね？

谷垣はしばらく河村の返事を待つ。

谷垣の部屋のドアが出し抜けに開かれた。角刈りのいかつい顔をした男が顔を出す。目つきが鋭く、年の頃は三十代と思われた。

「またパソコンですか、直人さん。お好きなことですねえ」

男の声にはどことなく険が感じられた。谷垣が露骨に嫌そうな顔をして言った。

「佐藤さん、入る時はノックしてくれっついても言ってるじゃないですか」

谷垣の抗議を受けても、佐藤と呼ばれた男に悪びれる様子は見られない。

「ノックねえ。必要なですかねえ、そんなもん。どうせ直人さん、ろくなことしてないでしょ？ アダルトサイトや下らんアニメ見たり、つまらんブログ更新させてるだけじゃないですか。要らんでしょ、ノックなんて。あんま変なもん見ないで下さいよ。お父様からそう仰せつかってるもんでね。困るんですよ、またイカして事件でも起こされたら。お父様は今大変な時期ですからね。そんなときにぶー太郎の息子が馬鹿やらかしたら、致命傷になりかねない。この意味、いくら直人さんでも、わかりますよねえ？」

「わかってますよ。……用はそれだけですか」

「ええ」

「なら、もう出てっつて下さい」

「はいはい」

佐藤は出ていった。

(清の野郎、俺のことなめくさりやがって。くたばりやがれ)

谷垣は心の中で佐藤に呪詛を吐く。佐藤清、三十四歳。谷垣の監視役にと父親の民自党総裁・谷垣一禎が連れてきた男だが、谷垣はその素性をまるで聞かされていなかった。ただやくざな雰囲気は漂

う、怒らせたくはない男だということ、何となく思わざるを得なかった。

河村の新しいコメントが付いた。

「そうだな。綾瀬はるかにそっくりだよ。もう無茶苦茶似てる！綾瀬激似だぜ？ 絶対会いたくなったる？」

谷垣はすぐさま返事を書く。

そりゃあ、もう。是非会いましょう。いつにしますか？

谷垣は早くも予定を考え始めていた。それが甘い罠とは知るよしもなく。

第三章 ファーストコンタクト

「というわけで、ネットで知り合った人と次の日曜日で会うことになりました」

谷垣は河村たちと会うことになった件について、佐藤に告げた。なぜこんなことをするかというと、谷垣には外出時にも佐藤の監視がつくようになっていたからであった。決めたのは父の一禎である。

「はあん。で、どういったお知り合いなんですかね、その人たちは？」

佐藤が露骨に胡散臭そうな表情でいる。

「だから、ネットの知り合いですよ」

「アダルトサイトの？」

「違いますよ。何言ってるんですか」

「何人と会っただけでしたっけ？ 野郎だけですか？ それとも女も？」

「それぞれ一人ずつという話です」

「ははあん。女目当てですね。凶星でしょ？」

佐藤は谷垣を馬鹿にしきった眼差しを送った。

「まさか」

「まあ、何でもいいですけどね。馬鹿やらない限りは」

それだけ言うと、話は終わりだとばかりに、佐藤は谷垣の前から姿を消した。

(本当に嫌な奴だ。死ねばいいのに。また呪ってやるか)

谷垣はノートとハサミを取り出した。ノートに切り込んでいく。人形に紙をかたどる。紙の人形の完成である。その紙人形に佐藤清と書く。谷垣は紙人形を細かく切り刻んでいく。これは、谷垣が独自に編み出した呪殺方法であった。

次の日曜日、午後一時。谷垣は渋谷駅の八千公前を目指していた。そこが河村たちとの待ち合わせ場所であった。

(綾瀬はるかに激似か。会うのが楽しみだ。久しぶりにわくわくする。これはこの何年かはなかった感覚だな)

谷垣はすぐに会うことになる美人のことを思うと、不思議に足取りが軽くなるような気がしていた。谷垣の脳裏には、完全に河村のことは忘れさられていた。美人のことしか頭にない男であった。

「どんな奴なんでしょうね、廃人無職青年」

箕輪が近藤に聞いた。

「うむ。おそらく、人相の悪く、不恰好にして不細工な冴えない中年男だろうと春雄は予想しているのである」

「ですよねえ。スパイだし、エヴァとエヴァファンのことをけなしてましたからね。きっと芸術がわからない、物凄く鈍感な奴ですよ」

近藤が腕時計を見た。

「もう時間なのである。遅いのである。もしや、かんづかれたか？」

途端に近藤の顔が険しいものに変わった。

「それはないですよ、先輩。しかし、それらしいのは来ないですね。なんでしたっけ、特徴」

「黒ぶち眼鏡に黒ズボンで来ると言っていたのである」

谷垣は既に八千公前の近くまで来ていた。遠くから、様子を窺っていたのである。佐藤も一緒だ。

(ここに綾瀬はるかがいるんだよ。騙しか?)

谷垣の頭に自分が担がれたのではないかという疑念が浮かんだ。携帯電話を手に取り、河村から聞いた携帯電話のメアドにメールを

送る。

私令、八子公前まで来てるんですが、本当に来てますか？

すぐに返事が届いた。

いるのである。黒ズボンに眼鏡をかけたのが、俺である。俺の隣には、話した彼女がいるのである。待ってるから、すぐに来てくれなのである。

(本当にいるのかよ)

谷垣は半信半疑であった。佐藤が谷垣の顔を覗き込む。

「はめられたとかないですよねえ？ ま、ネットの人間関係なんて、いい加減なもんだとは思いますが。騙されたとしたら、恥ですな。いい年して、スケベ心につられて、まぬけ面晒して、何やってんですかねえ。やれやれ」

佐藤の毒舌は容赦がなかった。さすがに谷垣もむっとした。

「まだ、騙されたと決まったわけではないです。ちょっと行ってきます」

谷垣は八子公像に近付いていく。

「はいはい、お供しますよ」

佐藤も従う。

「黒ぶち眼鏡に黒ズボン……。先輩、あれじゃないですか？ 来たみたいですよ」

箕輪が近藤の肩をつつき、ある人物を指差した。近藤が指差し先を眺めた。二重顎で小太りの男が、向かってくる。

(この男が、日本アニメ滅亡を目論む、悪の工作員……………)

近藤はごくりと唾をのみ、喉を鳴らした。

谷垣も近藤と箕輪を眺めた。

(綾瀬はるかじゃねー。はめられた。ガリガリ骨女じゃねえか。誰得だよ)

一瞬、このまま何事もなく通り過ぎ、帰宅してしまえという考えが頭をよぎる。それを実行しようかと思ったとき、骨女が声をかけてきた。

「あの、廃人無職青年さんですよね？」

「え？ え、ええ、そうですよ」

違つと答えればよかつたと谷垣は後悔していた。

「あなたが、『俺がゼロ様』ですか？」

谷垣が近藤を見て言った。河村はネットで「俺がゼロ様」というハンドルネームを使っていたのであった。

「うむ。いかにも、俺がゼロ様である。宜しく頼むのである」

(なんかネットとキャラが違つような気が)

谷垣は近藤に違和感が感じられて仕方がなかった。

第四章 悪魔、再び

谷垣が骨女が肩にさげているものを見て言った。

「それ竹刀袋ですよね？ 何で持ってるんですか？」

骨女の表情に焦りの色が混じった。

「ああ、これですか。道場行ってきたもんで」

「そうでしたか。……それで、お名前は？」

「えっと、伊藤仁美です。宜しくお願ひしますね」

伊藤と名乗った骨女が一礼する。

「伊藤さん。はい、こちらこそ」

谷垣も頭を下げた。

「そちらの方はどちら様ですかね？」

伊藤が佐藤を見つめて訊ねた。

「この人はですね」

「佐藤清。お守りについてきた。気にしないでくれ」

佐藤が谷垣の言葉を遮って発言した。

「それでは、ゼロ様が案内するのである」

ゼロが歩き出す。

「どこへ行くんですか？」

谷垣がゼロの後を追いつながら聞く。

「ついてくればわかるのである。話しているのは、時間がもつたいないのである」

ゼロはどんどん先を歩く。

谷垣は、自分たちが段々と人気のない、さびれた場所に足を踏み入れてしまったような気がしていた。

（なんか人が少ない、寂しいところに来ちゃったなあ。この人、何考えてんだろ）

谷垣は漠然とした不安に包まれた。

「すみません、どこへ行かれるんですか？ そろそろ教えてもらってもいいんじゃないですか？」

「もつすぐである」

ゼロはにべもなく答えた。

「もうすぐですって」

骨女が笑顔を見せた。谷垣は何となく、それがぎこちなく、胡散臭いものを感じられた。

「そわそわするなって。みっともないですねえ。黙って歩きましょうよ」

佐藤が苛立たしげに吐き捨てた。

(こいつ。……しかし、どこに行くんだ？ この先には、何もなさそうだが)

「まだ気がつかないとは、いつまでも鈍い男だな、直人。お前は、はめられたんだよ」

谷垣の耳に老人の声が飛び込んできた。聞き覚えのある声だ。声優・家弓家正の声である。家弓はアニメ映画『風の谷のナウシカ』クロトワ役、『クレヨンしんちゃん 爆発！温泉わくわく大決戦』アカマミレ役、『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』人形使い、テレビアニメ『ラーゼフォン』エルンスト・フォン・バーベム役、『鋼の錬金術師 FULLMETAL ALCHEMIST』お父様役・ナレーション等で出演しているベテラン声優で、谷垣が大ファンの声優であった。だが、この場には家弓の姿はない。谷垣は瞬時にそれが自分にしか聞こえない幻聴だと気がついた。以前にも、家弓はじめ、谷垣が聞き知った声優等の声の幻聴が聞こえたことがあったからである。

(馬鹿な！？ 俺は処方された薬は飲んでいる。もう幻聴は聞こえないはずだ)

「薬などで俺らを妨げることはできん。俺らの力を甘くみるな。それより、お前はこいつらにはめられた。こいつらは、お前を闇討ちにするつもりだ。早く逃げろ」

谷垣は幻聴の話に眉をひそめた。

(闇討ち？ 俺なんかを闇討ちしてどうする？ 俺は確かに民自党総裁の息子だが、それだけだ。何の得になる？)

「こいつらは、お前が作業員であると見抜いているのだ。お前の都条例改正問題についての発言も気に入らないそうだ。そして、お前が日本アニメを滅ぼそうと悪計を張り巡らせているとも考えている」

(日本アニメを滅ぼす？ 俺が？ そんなこと考えたこともない。馬鹿馬鹿しい。またお前らのでまかせか。もう騙されんぞ)

「エヴァやエヴァファンの悪口を書いたのが災いしたのだ。悪いことと言わん、今すぐ逃げろ」

(そうやって俺に恥をかかせる気だろ。その手は食わない)

「なら聞くが、この女はなぜ竹刀を持ってきている？ こんなもの、何に使う気だ？」

(道場の帰りだと言っていたが)

「自宅に一旦帰らずに、そのまま渋谷に来たと？ 稽古をしたのな

ら、汗をかく。女子ならシャワーを浴びたいはずだがな。おかしいとは思わないのか、直人」

谷垣は少しだけ伊藤に疑念を抱いた。

「まだ信じないか？ ならば、都条例改正について意見を聞いてみる。こいつらは強硬な反対派だ。きっと反対するはずだ。ネットで話題になっている都庁襲撃の噂についても、真実だと信じ、襲撃犯を支持するはずだ」

「突然で何ですが、ゼロさんと伊藤さんは今話題になっている東京都の漫画規制について、どう思いますか？」

ゼロを背後を振り返った。

「絶対反対である！ 原石は邪悪な老害ファシストなのである！ 芸術を規制しようなどと考える奴は、悪魔の手先なのである！ 都庁襲撃、万歳である！ 正義の鉄槌が下されたのである！ くたばれ原石！である！」

ゼロは興奮気味であった。

「私も反対です。原石なんてじいさん、早くくたばっちまえばいいんですよ。変に長生きしちゃって、迷惑です。都庁なんて襲われて当然ですよ。都庁の人間なんて、みんな死ねばいいんです」

伊藤が口を尖らせて言った。

「ほら、言った通りだろう。まだ間に合う。直人、逃げろ」

谷垣は急に不安になってきた。

第五章 伝説の拳法

(なぜこの二人が都庁襲撃を支持するとわかったんだ?)

「未来が見えた、とでも言っておこうか。それより逃げる。手遅れになるぞ」

谷垣は反転し、今来た道を走り出した。

「どうしたんです?」

佐藤が怪訝な様子である。

「先輩、こいつ逃げますよ!」

骨女がゼロに危急を告げ、谷垣の後を追う。

「なぬ! 逃がすか!」

ゼロも走る。

「どうなってんだ、まったく!」

事態が飲み込めない佐藤も駆ける。谷垣、骨女、ゼロ、佐藤の順である。

「佐藤さん、そいつらは私の命を狙ってるんですよ! 倒してください! お守役でしょ?」

「何言つてんだよ、あんたなんか狙ったって何になるんだよ」

佐藤は取り合わない。

骨女が竹刀袋から竹刀を取り出す。

「待て！ 天誅——————！」

「……………」

佐藤はあつけにとられている。

「佐藤さん、こいつらを早く何とかしてくださいよ！」

「ちつくしょう——————！ 何なんだよ！」

佐藤が急に猛烈なダッシュに入り、ゼロと骨女を抜き、その前に立ち塞がった。

「ここは俺が防ぐから、先に行け！」

「すみません！」

谷垣は佐藤に礼を述べつつ、走り去っていった。

路地裏で近藤・箕輪と佐藤の戦いが始まった。

「めえええええええええええええええええん！」

箕輪が佐藤の頭を狙い、竹刀を繰り出す。佐藤が左へ避ける。竹刀は虚しく空を斬る。

佐藤の回し蹴りが箕輪の後頭部を捉えた。

「っ！」

箕輪が崩れ落ちる。気絶した箕輪の腹に佐藤が蹴りを放つ。

「この外道！」

近藤が佐藤に接近し、張り手を送る。しかし、佐藤は後ろへ飛びさがつた。

「箕輪君、しっかりするのである！」

近藤が箕輪を抱き起こし、頬を叩く。だが、反応はない。

「箕輪君を一瞬で倒すとは。只者ではないのである」

近藤は張り手がいつでも放てるように身構え、佐藤と対峙した。

「あんだ、原江神拳って知ってるか？」

「原江神拳？」

「スピリチャルカウンセラーとかで有名な原江啓之が創造した伝説の拳法だ。武道を志す者の間では、神話と化している。俺は昔、原

江先生からそれを習ってたんだよ。あんたらが何者か知らないが、俺に喧嘩を売った以上、この路地裏で昼寝してもらうことになる」

佐藤が動きを見せた。拳をうつてきた。

近藤も手で払う。近藤は拳を払うのに夢中で、佐藤の足の動きには目がいかなかった。

「！」

佐藤の蹴りが近藤の左わき腹に入ったのだ。

「どうだ？ 効くだろ？」

佐藤の顔が笑みで埋まる。しかし、近藤もにやりと笑った。

「何がおかしい？」

「効かのである。春雄には打撃は通用しないのである！」

近藤は体当たりしようと佐藤に突進する。佐藤は回避する。再び近藤の突進。また佐藤は避けた。

（なんだこいつ？ さつきから突っ込むんできやがる。何を狙ってる？ 俺のスタミナ切れか？ それなら！）

佐藤は近藤の次の体当たりを待った。

（来た！）

佐藤は近藤が間合いに来るのを待つて、地を蹴って飛翔した。

「おらああああああああああああああああああ！」

佐藤の蹴りが近藤の顔に直撃しようとしていた。

(勝ったな)

しかし、近藤は顔をよけると同時に、佐藤の足を掴んだ。

「何だと!?!」

「これを待つていたのである!」

近藤は佐藤を持ち上げ、地に叩きつけた。

「俺が。原江神拳の使い手の俺が。馬鹿な」

佐藤は気を失った。

近藤は箕輪を担いで歩きだした。

(廃人無職青年を取り逃がし、箕輪君は失神。今回は作戦失敗である。今日のところは大人しく帰るしかないのである。日を改めなければである。しかし、もうゼロからの呼び出しには応じないだろう。どうしたものか)

近藤は今後の天誅作戦について思案した。

第六章 知る人ぞ知る男からの報せ

東京虎ノ門に居を構える福岡研究所。原野伸介はそこで働く事務員であつた。某私大の政経学部を卒業した二十五歳である。原野は五條瑛の小説『鉾物シリーズ』の登場人物・葉山隆の影響で情報分析官に憧れたが、それは果たせなかつた。その代わりといつては何だが、外交・安全保障分野の情報提供を仕事とする福岡研究所に事務員として就職した。所長の福岡久彦は元外交官で、保守派の論客として知られていた。

「原野君、お客さん。受付にいるよ」

一回り年上の事務員が原野に言う。

「誰ですか？」

「会えばわかるって。何でも大学時代の大親友だとか」

「大親友……。。今行きます」

原野にも思い当たるところがなかつた。席を立ち、受付へと向かう。

受付にその男はいた。丸顔で眼鏡をかけ、二重顎。小太りでもある。

「谷垣……。。さん、どうしてここに？」

一瞬さんづけを迷つた原野だつた。谷垣直人は大学時代に同じ授業を受講した関係で、少しだけ親しくなつた間柄であつた。大親友

とはとても言えない。こいつは何を誤解しているのかと原野は思った。

「おお、原野君、おひさ。実は」

「帰ってください?。」

原野は谷垣の言葉を遮り、退場勧告を告げる。

「それはないんじゃないの? まだ何も言っていないし」

うるたえる谷垣。

「今仕事中ですから」

原野は谷垣に背向け、自分の席へ戻ろうとする。

「ちょっと待てよ」

谷垣がたまらずその肩を掴んだ。

「今俺はやばいんだよ。助けてくれよ。友達だろ?。」

「私と谷垣さんの関係ってそういう関係でしたっけ? 私が考え違いをしてるんでしょうか。別にそう親しくはなかったと記憶してますけど」

「俺は命狙われてんだよ。少しの時間でいいから、ここにかくまってくれよ。な、いいだろ、伸ちゃん?。」

「伸ちゃんて、随分馴れ馴れしいですね。やめてもらえますか？ そんなの、警察にでも駆けこめばいいじゃないですか？ それか、お父さんに助けてもらえばいいのでは？」

谷垣が渋面を作った。

「警察の世話にも、親父に助けも借りたくはない。頼む原野君、俺を助けてくれ！」

「谷垣さん」

原野が谷垣の顔をまっすぐに見つめて言った。

「おお！」

「仕事の邪魔でしかないの、帰りましようね。何度も同じこと言わせないで下さい。それじゃ失礼」

原野は谷垣を残し、立ち去った。

「くそ！ お前なんて呪ってやるぜ！ 覚えとけ！」

近藤は携帯電話の画面で廃人無職青年のブログを見ていた。箕輪は箕輪の自宅にきちんと帰宅させていた。近藤が読んでいる記事のタイトルは、『また問題発言をしてしまった……』。「所詮たかがアニメのキャラ名。覚えて何になる？ 笑。」。

俺はとんでもない悪役だな。あれだけアニメを見ておいて、この台詞。全アニメファンを敵に回しかねない発言だ……。

近藤は眉間にしわを寄せ、険しい表情だ。

(問題発言をしたと書いておきながら、削除も打ち消し線も撤回も謝罪もなしとは。この男、とても反省しているとは思えないのである。やはり、悪徳社員たるもの、鈍感で無神経にして無反省な性格でなければ、務まらないということなのか。恐れ入る限りなのである)

近藤は携帯から目を離し、天井を見上げ、腕を組んだ。考え事をするときの近藤の癖である。

(どうやってこの男を誘いだせば。もうゼロの手は使えないのである。どうすれば……)

近藤の携帯が鳴った。メールの着信音だ。メールが届いたのか。いったい誰からかと近藤が携帯を操作する。送信者は「知る人ぞ知る男」。近藤に覚えはなかった。

「これは！」

近藤は知らず知らずのうちに声を発してしまっていた。

あんたが追ってる男、廃人無職青年の本名は谷垣直人。東京の有名な高級住宅地　で両親とともに暮らしている。

そのメールには、廃人無職青年の自宅の電話番号と住所が書かれていた。

（事実なのかどうか、確認する必要があるのである。しかし、「知る人ぞ知る男」とは、何者……）

近藤は送信者の正体を考えて見たが、いつこつに見当もつかなかった。

（送信完了。これでよかつたんだよな？）

「知る人ぞ知る男」関根哲夫は携帯電話を閉じた。関根はかつて悪魔に操られて廃人無職青年を襲おうとしたが、別人を襲い、逆に取り押さえられて逮捕されたニートであった。

「ああ、そつだ。よくやつてくれた。これでまた、面白くなる」

関根は悪魔ゼパルの命令で近藤にメールを送っていたのであった。谷垣直人の身に、再び危機が迫る。

第七章 三つ巴

谷垣は原野に断られたため、仕方なく自宅へ帰っていた。

(原野の奴め、今から呪いに呪いまくってやる。覚悟しろ)

谷垣はドアを開け、玄関へ一歩足を踏み入れた。

「おう、やっと帰ってきたか。待ってたぜ」

佐藤が玄関で立っていた。かと思うと素早く谷垣に近付き、腹にパンチを放った。

「うぐ！」

谷垣がうめき声をあげ、膝を屈した。

「おいおい、勝手に休むなよ」

佐藤が谷垣の髪の毛を引っ張り上げ、顔を上げさせる。

「いいかあ、直人、お前の所為でなあ、俺はひでえ目に遭ったんだよ。あんなわけのわからんガキにやられて、俺のプライドはスタスタだ。もう生きていけねえかもなあ。このまま死んじまおうかあ。．．．．．なわけねえ！ おいこら、あいつらどこの誰だ？ なにもんなんだ？ 教えねえとマジでぶっ殺すぞ？ 言え」

「あの男は、ネットでは『俺はゼロ様』と名乗っていた」

「はあはあはあ。……………で？　それだけかよ！」

佐藤の拳が谷垣の腹に食い込んだ。

「ぐふっ！」

「もっと他になんかねえのかよ？　殺されてえか？　俺はマジでアツタマきてんだよ。お前、死ぬよ？」

「あ、IPアドレスで、誰だかわかるかもしれない」

「IPアドレスか。なら、さっさとやれ！　ぶち殺すぞ！」

佐藤は谷垣の尻に蹴りを入れ、調べるよう促した。

「へー、廃人無職って谷垣直人って名前だったのか。誰からの情報？」

河村が近藤に聞いてきた。近藤は今、携帯電話で河村と廃人無職青年について話していたところだった。

「それが、わからないのである。ただ、『知る人ぞ知る男』としか」

「『知る人ぞ知る男』？　それはわかんねえな。誰だろ？　……………ま、いいや。……………春雄さん、確かめに行くんだろ？」

「うむ。できるだけ早く確かめなければならぬのである。時が経

ては経つほど、日本アニメ滅亡は早まるのである」

「そうは言うけどさあ、ほんとにあいつが日本のアニメを潰そうとしてんのかなあ？ 俺はどうもそうは思えないんだが」

「間違いないのである！ あの男は、ブログだけでなく、2ちゃんねるでも反日本アニメ工作活動を展開しているに違いないのである！ こうしている間にも、今まさに日本アニメは滅びの日を迎えようとしているのである！ 断固阻止すべし、である！」

「わかったよ、もうわかったからさ。それで、いつ行くんだ？」

「明日にでも行くことと春雄は考えているのである。ゼロも来てくれるか？」

「明日か……。いいぜ。今度は俺も行く。箕輪さんは来るのか？」

「箕輪君は佐藤なる男に頭を蹴られたばかり、連れていくわけにはいかないのである。これは、春雄とゼロ、二人だけの秘密なのである」

「そういうことなら、わかった。箕輪さんには内緒にしておこう」

「これが『俺はゼロ様』とやらのIPか」

佐藤が谷垣が操作するパソコンを覗き込んでいる。

「俺の知り合いに、こういうのに詳しいのがいるんだよ。そいつに当たってみる。じゃあな、クソガキニート」

佐藤は谷垣の部屋から出て行った。

(くっそー！ 二発も殴りやがって、あの糞野郎！ 死ねよ！ 呪ってやるー！ 待てよ。原野も呪うんだった。今日は忙しいな)

谷垣はノートとハサミを取り出し、呪殺作業を開始した。

「関根、お前の働きのお陰で、谷垣は明日、近藤たちの襲撃を受けることになった」

悪魔ゼパルは関根に満足気に語りかけた。

「特に何もしてないがな。そうか。あいつ襲われるのか。ざまあねえな」

関根も愉快そうに頬を歪めて笑った。

「どうだ関根、お前も身に行っっては？ 面白いものが見られるかもしれんぞ？」

「んん？ それは楽しそうだが、俺も巻き込まれるんじゃないのか？ 面倒は御免だぜ」

「何かあれば、俺が助けよう」

「あんたは信用なんねえな。あんたのせいで俺は犯罪者になっちまったんだし」

「ほう。そうか。それなら、お前との関係もこれっきりだな」

ゼパルが冷淡に言った。

「ま、待てよ、それは困る」

関根が慌てふためいた。孤独なニートである関根にとって、ゼパルは貴重な話相手であったのだ。

「まあ、いいだろう。許してやる」

「ふう」

関根が安堵する。

「見物ってどうやってするんだ？俺は望遠鏡とか持ってないぞ？」

「その点は心配いらぬ。俺に考えがある」

谷垣・佐藤、近藤・河村、ゼパル・関根。三つ巴の戦いが、今幕を開ける。

第八章 夏の刺客

河村は谷垣直人宅の最寄り駅の改札に立っていた。そこで近藤と待ち合わせることにしたのだ。河村は予定より十分ほど早く着いていた。

(早く着き過ぎちまったな。この格好じゃあ、恥ずいぜ)

河村はテレビアニメ『コードギアス 反逆のルルーシュ』シリーズのゼロのマスクをつけ、青のTシャツに短パンという服装で、ちくちくと歩いた。

「……ゼロ。ゼロ。」

河村がぼーっとしていると誰かが声をかけてきた。その人物を見つめる。サングラスをかけ、麦わら帽子に肩まで伸びた長髪、口髭に泥鱗髭。

「は？ 誰？」

「春雄である」

「は、春雄さん！？ どうしたんだその格好は！？」

俺の格好もやばいが、こいつも相当だぜ、と河村は思った。

「春雄は廃人無職青年に顔を見られてしまっているのです。そのため、変装をしてきたというわけである」

「ああ、そういうことか。びっくりしたぜ」

「ゼロこそゼロ服はどうしたのだ？」

「ゼロ服？ あれはさ、この前原宿でコスプレしてたら、すごい汗かいたんだ。それで今、クリーニング出してる」

「そうか。しかし、剣はもってきててもよかったのではないか？」

「あ！ やべえ！ 忘れた……………」

近藤がやれやれと肩をすくめた。

「まあ、いいじゃねえか。剣なんかなくても、俺は強いぜ。はいやあたたたたほわちやあちよー！ 拳をなめるなよ？」

「うむ。ゼロの活躍、期待しているのである。では、行くのである」

近藤が歩き出す。

二人はお目当ての邸宅を見つけた。

「ここである」

確かに「谷垣」と表札がある。

「でかくて立派な豪邸じゃねえか。あいつの父親は何やってんだ？」

「それは春雄にもわからないのである」

「どうすんだ？　ここで奴が来るのを待つか？」

「むむむ」

近藤が難しい顔をして腕を組む。

「おい、なんか乞食がいるぜ」

河村が顎をしゃくる。その方向には、薄汚れた半袖のシャツを着たホームレスの姿があった。

（本当に来た！）

関根は興奮していた。

「当たり前だ。俺には未来が見えるのだ」

河村が見た乞食は関根の変装した姿であった。関根は近藤たちと谷垣の戦いを特等席から見物しようと、乞食に身をやつして谷垣邸前に段ボールを敷き、陣取っていたのである。

関根はこのために準備を整えていた。まず、新品のワイシャツを土で汚し、鬘と付け髭を買った。今の関根は誰が見ても、頭がぼさぼさ、髭もじゃしもじゃの乞食にしか映らないであろう。それくらの出来栄であった。

（さあ、何が起こるんだ。俺にお前たちのアホさ加減を見せてくれ）

関根は騒動が起こることを切に望んだ。でなければ、こっまでした意味がない。

「あちいなあ」

河村がぼやく。

「出てこないじゃん。だりいなあ。クソ暑いし。……死ぬ。このままじゃ死ぬな」

「確かに暑いのである。春雄は夏は苦手なのである。早く終わってくれることをいつも願わずにはいられないのである」

近藤が額に浮き出た汗をハンカチで拭う。ふいてもふいても、玉のような汗はどんどん湧き出てきていた。

「春雄さんもか。俺も暑いのは嫌いだな」

河村も首の汗をハンカチで拭い取った。

(こいつら何無駄話してんだ。早く行けよ！ 突っ込め！ 殺せ！)

関根が心の中ではやしたてるが、むろん現実には何の力も及ぼさ

ない。

「すげえ汗。……………不味いぜ。これは不味いよ」

河村がいつになく真剣な声色で言った。

「うむ。不味いのである。不味すぎるのである」

近藤も同調する。

（何が不味いつつうんだよ。俺にとつちや、お前らがただぼけーつと谷垣の家の前で突っ立ってるのが不味いよ。てんで不審者だろうが。チャイムでも鳴らせ。そして谷垣をぶっ殺せ！）

関根は焦りの色を浮かべた。

「このままじゃ脱水症状だぜ？ 夏は水分補給しないと。ぶったおれちまう。なんか飲もう。一時撤退だ」

「うむ。賛成である」

二人は谷垣邸から離れ、駅の方へと向かった。

（なんなんだこいつらは。そんなもん、最初から買っとけよ。馬鹿か、馬鹿なのか）

関根はただただ二人の行動にあきれるしかなかった。

第九章 反撃の兆し

谷垣邸の玄関に男たちが集まっていた。谷垣、佐藤、それに佐藤が呼び集めた男たち。スキンヘッドに、角刈り、鼻と耳にピアスの男、眉毛なし、時代遅れの感があるリーゼントに、パンチパーマ。六人の男たちは、みな一樣に目つきが悪かった。こんな奴ら、どこから連れて来たんだと谷垣は訝ったが、それだけで、表情に出すことさえ憚られた。また佐藤に殴られてはたまらない。

「さつきも言ったが、じゃあ俺はテツヤ、ツヨシと一緒に河村英樹の家に行く。テルヒコたちはこの馬鹿についてってその辺ぶらぶらしててくれ。もしかしたら、河村たちが何か仕掛けてきてくれるかもしれないからな。そのときは、殺さない程度にいたぶってやれ」

「リョーカイっす、清さん」

テルヒコという名前らしいピアスが返事をする。俺はこいつと一緒に行動しなければならぬのかと思うと、谷垣は絶望的な気持ちになった。

関根は玄関から谷垣たちが出てくるのを目撃した。

（出てきた！ 出てきちゃったよ！ どうする俺！？ 奴らに知らせるか）

関根は慌ててポケットから携帯を取り出した。

(どいつが谷垣なんだろう?)

「顎が二つあって、坊主頭、丸く太った顔の男だ」

ゼパルが的確に説明する。関根はゼパルの指摘通りの男を発見した。

(あいつか。そうか、あいつが……)

谷垣たちは二手に分かれた。駅の方角とその逆。

(一緒じゃないのか? ……まあい。とにかく知らせない)

「だからさあ、言ってんじゃん。断然ポカリだつて」

駅の方へ歩きながら、河村は近藤に力説していた。

「いや、春雄はアクエリ派である」

「アクエリアスは苦いじゃねえか。どこがいいんだ? さっぱりわかんねえ」

「確かにアクエリは苦いのである。だが、良薬口に苦しと言つてはなにか。代償を伴う分、それだけ水分が補給できるということなのだ、春雄は信じたいのである」

先ほどから二人は水分補給はポカリスエットかアクエリアスかという激論を戦わせていた。両者一步も譲らない。

「何で水分とるのに代償を払わなければならねえんだよ。わけわかんねえな」

近藤の携帯が突然鳴りだした。

「誰だ？」

河村が問いかける。

谷垣が外出した。駅とは逆の方角へ向かった。近くの遊歩道に行く模様。追撃せよ。知る人ぞ知る男より

「知る人ぞ知る男からのメールである！ 谷垣が動き出したのである！ 早く戻るのである！」

近藤は来た道を駆け戻る。

「おい、水分補給はどうすんだ！」

河村が大声で言った。

「そ、そうだったのである。早く何か買うのである！」

「わかった！俺がひとつ走り買ってくる！春雄さんは先に行つてくれ！」

河村は自動販売機に駆け寄る。

谷垣邸へと急ぐ近藤は、向かってくる三人の男の姿を目にした。真ん中を歩く男に目が行った。

(あの男は、谷垣と一緒に居た佐藤という奴である。ここはやりすごすのが都合なのである)

近藤は俯いて走った。

「おいおいおいおい、あんた、下向きながら走ってたらあぶねえじやねえかよ」

近藤の前にスキンヘッドの若い男が通せんぼとばかりに立ち塞がり、おどけて見せた。

「おいテツヤ、通してやれよ」

佐藤が苦笑している。しかし、テツヤは言うことを聞かない。

「お前何グラサンかけてんの？ かつこいいと思ってるの？ だせ

え。全然似合っていないぜ？ 偉そうに髭伸ばしやがってさ、お前何様だよ」

テツヤが顔と顔がくつつくほどに近藤に顔を近づけた。

「いい加減にしてくれなのである！ 急いでいるのである！ どいてくれなのである！」

たまらず、近藤が悲鳴を上げた。

「こいつパニくってるよ。マジ受けるんだけど」

テツヤが手を叩いて笑った。

しかし、佐藤は厳しい顔つきになっていた。

「清さん、どうしました？」

「俺こいつの声と話し方、聞き覚えるんだよ。そんなに前じゃねえ……」

佐藤が記憶を遡ろうと目を閉じた。

「そ、それでは失礼するのである」

近藤が無理に通ろうとする。

「待てよ。ここは通すわけにはいかねえなあ。お前、何者だ？」

テツヤがぎりぎりまで近藤に顔を近づけ、凄んだ。

「あ！ こいつだよ、こいつ！ こいつが河村だ！」

佐藤が両目を見開いて、近藤を指差した。

「こいつが！ マジすか！ 野郎！」

テツヤが間合いを取った。

「こいつ、変装なんかしやがって。また直人の奴を狙うつもりだつたんだろうが、そうはいかねえ。俺も仕事なんだよ。クビになつたら食っていけなくなる。お前には、この前の借りをきっちり返してやるぜ」

近藤は三人に囲まれた。

第十章 ポカリはアクエリを駆逐できるか

「気をつけるよ。俺はこいつにやられたんだからな。こいつは見かけによらず、なかなかできる」

佐藤がスキンヘッドと角刈りに注意を促した。

「マジですか。こんな奴に清さんがやられたなんて、俺信じらんないですよ」

角刈りが驚いた顔をする。

「清さんも調子が悪かったんじゃないですか。こいつそんな強いんですかね？ 似合わねえロン毛に、今どきおかしいださい麦わら帽子、さらに似合わないグラサン、もっと似合わない髭。こいつのセンス、完全にいっちまってますよ。こんなのに負ける気がしねえ。こっちは三人ですし。うわっ！ こいつ汗いっぱいかいてますよ。きったねえ。こいつかなりびびってんじゃないですか」

テツヤがへらへらと嘲り笑う。

「誰から行く？」

角刈りが佐藤とテツヤに聞いた。

「もち、俺からだろ？ 清さん、こんな奴、俺が秒殺してやりましょ。そうですねえ……。十秒。いや、五秒。五秒もあればこいつを半殺しにしてやりますよ」

テツヤが不敵に笑い、豪語した。

「いいぜ。早くやって見せる」

佐藤が短く命じた。

「それじゃあ、遠慮なく」

テツヤが拳を握りつつ、近藤との間合いを詰めた。近藤も身構え、警戒する。

「あふあ!?!」

突然、テツヤの鼻柱にペットボトルが直撃した。テツヤはそのまま後ろへ倒れた。

「なんだ!」

佐藤がペットボトルが飛んできた方角を見る。

「ぐほおっ!」

またもペットボトルが舞い、角刈りの鼻を打つ。角刈りも崩れ落ちた。

「一人相手に三人がかりとは、卑怯者どもが。そんな真似は、この俺が許さねえ」

「ゼロ!」

河村が立っていた。

「な、なんだお前は!?!」

佐藤は動転していた。

「俺か？ 小賢しい悪党に名乗る名前はねえが、平成世直し救世主
仮面ゼロ、とでも名乗っておくか」

しつかり名乗っているではないか、と近藤は思った。

(二対一か。これは分が悪い。ここはひとまず退散するしかないさそ
うだな)

佐藤は瞬時に結論を出すと、谷垣邸へ向けて走り出した。

「覚えてやがれクソガキども！ この借りは必ず返す！ それまで
首を洗って待っとけ！」

「待てなのである！ ゼロ、追いかけるのである!」

河村はと言えば、落ちたペットボトルを拾っていた。

「わかってる」

「そんなもの、ほっとけなのである!」

「これ一本百五十円するんだぜ？ これも金だよ。もったいねえ。
ほらよ」

河村が近藤に一本投げてよこした。

「……ポカリではないか！ アクエリはどうしたのだ？」

近藤が詰問する。

「え？ そうだっけ？ まあ、細かいこと気にすんなよ」

河村は駆けだした。

（この男、絶対わざとポカリを買ってきたのである。しかし、春雄は改宗などしないのである）

河村の魂胆を知り、警戒する近藤であった。

（へっへっへっ。これでこいつもポカリ派に鞍替えだな。アクエリなんてまずにがいもん、飲み物じゃねえ。俺はアクエリなんて認めねえ。ポカリさえあれば、十分だぜ。いずれ、アクエリはポカリによって駆逐されることは間違いないと俺は睨んでいる。春雄さんがアクエリ派やってんのも、あとわずかだな）

河村は密かに近藤がポカリ派に転向するのを期待していたが、その可能性は低そうであった。

谷垣と佐藤の柄の悪そうな子分たちは、遊歩道を歩いていた。

（こんな奴らと一緒に居ては、俺もチンピラだと思われてしまう）

（どうやら近藤たちと佐藤たちとの間で一戦起こったようだな。これで谷垣は一人。今ならやれるな）

関根は自分が勝手に事件を起こして逮捕されたにもかかわらず、そのことで谷垣を恨んでいた。今こそ恨み晴らすときということである。関根はズボンのポケットに忍ばせたナイフを取り出した。

第十一章 ヤンキー無念

関根はゆっくりと谷垣に近付き、背後をとると、話しかけた。

「おい」

「？」

谷垣が何だとはかりに振り向く。関根がバタフライナイフを握っていることを見ると、見る見る顔から血の気が引いていった。

「な、ななななな、なんの用だ？」

谷垣は明らかに動揺していた。ふいにおかしさがこみ上げて来て、関根は吹き出してしまった。

「ぶつ。……ここで会ったが何とやら、だな。廃人無職青年、本名・谷垣直人、俺はお前にちよつとした恨みがあつてな。そういうわけで、お前にはここで死んでもらうことになった」

「何を言つんだ、あんた、気でも狂ってるんじゃないのか！」

「狂ってる、か。そうかもな。俺は狂ってる。だが、それがどうした？ もうじき死ぬお前には、関係ないぜ！」

関根がナイフを手に、谷垣に向かって駆けていく。

佐藤は谷垣邸に駆けに賭けた。息が上がっていた。額に汗が流れる。谷垣邸が目の片隅に見えた。

(あと少し……)。あと少しだ。こつなりや、籠城だ。家の中にいければ、何とでもなる)

「待てよおっさん！」

「待つのである！」

麦わら帽子のグラスンとマスクがすぐそこまで迫って来ていた。

(クソっ！ こいつら、はええな。追いつかれる！)

「あれ？ 清さん？」

テルヒコだ。テルヒコ、マコト、タカシ、リョウタは佐藤と合流すべく、谷垣邸の前まで来ていたのだった。

「助かった。あいつらだよ！ あいつらが河村だ！ ぶちのめせ！」

ピアスのテルヒコがにやりと笑う。喧嘩が好きで好きでしようがない連中ばかりである。

「行くぞ、野郎ども！」

テルヒコが我先に走り出す。他の三人も走る。

近藤たちもテルヒコたちを認めた。

「む！ 谷垣の仲間か！ ゼロ、この者たちも原石の手の者に違いないのである！ 成敗するのである！」

「おう！ やったるぜ！」

「原石？ 何のことだ？」

テルヒコは意味がわからない。

河村が地を蹴り、飛んだ。

「はいやあたたたたたほわちやあちよー！」

河村の飛び蹴りがテルヒコの顔面に綺麗に決まった。テルヒコはその場に崩れ落ちた。

「てめー！」

眉毛なしのマコトが河村に殴りかかる。河村はマコトのパンチを一步退いて避け、拳を放つ。

「はいやあたたたたたほわちやあちよー！」

マコトの顔に河村の拳が埋まっていた。マコトも背中から昏倒した。

「はおおおおおおおおおおおおお！ 打倒破壊工作員なのである！」

近藤が両手をクロスさせ、Xの文字にし、リーゼントのタカシにタツクルを狙う。タカシは寸前で回避した。

しかし、近藤が超反応を見せ、即座に反転、タカシに再度タツクルする。今度はよけきれなかったタカシは、民家の門扉に頭をぶつけて気絶した。

仲間が次々と倒されるのを目撃したパンチパーマのリョウタは、戦意を喪失させ、恐慌を起こした。

「う、うあああああああああああああああああああああ！」

近藤たちに背を向け、逃亡を図った。

「リョウタ、どこ行くんだ！？ 逃げんじゃねえ！ 戦え！」

佐藤の叱咤もリョウタの耳には届かない。

「残すはお前ひとりだぜ？」

河村が佐藤に歩み寄る。

「クツ！ ちつくしょう！」

佐藤も逃げ出した。河村が追跡にかかる。

「やめるのである、ゼロ」

「なんでだ？」

「我々の目的はあくまで谷垣征伐にあるのである。それを忘れてはいけないのである」

「そうだったな。で、この後どうすんだ？」

「この家に侵入するのである」

「不法侵入になるぜ？」

「時には正義のために法を犯せばならないこともあるのである」

近藤は扉を開け、谷垣邸へ侵入した。

「しょうがねえ」

河村も谷垣邸へ足を踏み入れた。

谷垣は幻聴の指図通り、小銭がいつぱい詰まった小銭入れをズボンのポケットから取り出し、関根に投げつけた。

時間が戻った。小銭入れが関根の右目に当たる。

「！」

関根に激痛が走った。顔を顰め、ナイフを落とす。

「何をした！ 何をしゃがったああああああああ！」

関根が絶叫する。しきりに右目を触っている。

「ほら、今のうちだぞ。早く逃げろ」

幻聴の言われるまま、谷垣は動いた。

「うああああああああああああ！」

わけのわからない声を上げ、谷垣はその場から走り去った。

近藤と河村は谷垣邸の庭先に居た。二人は日陰になっている縁側に腰かけていた。

「でもさあ、やっぱり谷垣追いかけて遊歩道行った方がよくねえか？」

河村が当然の疑問を口にした。

「甘いのである、ゼロ」

近藤が笑みを浮かべた。

「甘い？ どういうこと？」

「確かに谷垣が遊歩道に向かったことまではわかっているのだけれど、しかし、それから先のことはわからないのである。この知る人ぞ知る男からもあれから連絡はないのである。それに、この猛暑である。あてもなく移動して、脱水症状で倒れでもしたら馬鹿馬鹿しいのである。それよりもむしろ」

「むしろここで谷垣が帰るのを待った方が上策、といことだろ？」

河村が答えを先回りして言った。

「その通りである」

「さすが春雄さん、冴えてるぜ。グッドアイデア」

河村が親指を立てて見せた。

「春雄は切れ者なのである」

三分後。二人は汗まみれとなっていた。

「あつちいなあ。陰にいるのに、どろいっことだよ?」

河村は盛んにハンカチで汗をぬぐっている。

「今日は三十度いくという話である」

近藤の顔も冴えない。

「このままじゃ不味いな」

そう言っつてポカ리를口に含む河村は、近藤がペットボトルの蓋を開けていないことに気がついた。

「飲んでないのかよ、春雄さん。水分取らないとマジでやばいぜ?」

「春雄はアクエリ派なのである。甘ったるいポカリなど、口にはできないのである。アクエリは成人男性のための飲みものである。ポカ리의如きお子ちゃま向けは、春雄はとても飲むことはできないのである」

「だからって」

「これは春雄のポリシーである。誰に何を言われようが、変えるつもりはないのである」

断固たる口調で近藤は宣言すると、春雄は立ち上がり、庭先に転がっていた大きな岩を手に取り、振りかぶる。

「何をするんだ?」

「もはやこれまでなのである。かくなるうえは、室内に侵入し、クーラーで涼しくして谷垣を待つ計画に作戦変更である」

「器物損壊に不法侵入だな」

冷静に河村が発言した。

「はおおおおおおおおおおおおお！」

近藤が縁側のガラスに大岩にぶつけた。

けたたましい警報が鳴り響いた。

「やべえ！ ガラスを割ると警報機が鳴る仕組みになってたんだ！ はやくずらからねえと、警備員か警察が来るぜ！ 春雄さん、ここは撤退だ！」

河村が門扉へと走る。

「無念なのである！」

悔しさに顔をにじませつつ、近藤も逃亡を開始した。

二人は駅へと走った。頭一つ分近藤より先を走る河村だったが、突然、近藤の気配が消えたのを感じ取った。慌てて足を止め、後ろを振り返る河村。近藤は歩道に倒れていた。

「春雄さん！」

近藤に駆け寄る河村。

「き、気分が悪いのである……。く。苦しい……。」

近藤は血の気が引き、顔色が良くない。

「こりゃあ脱水症状じゃねえのか？ だからポカリ飲めって言ったんだよ！」

近藤はがくりと頭を垂れた。失神したのだ。

「春雄……！」

近藤を抱えて、河村はあたりかまわず叫び声を上げた。

第十三章 白昼公園トイレの闘争

近藤が目を覚ますと、目の前には河村の姿があった。

「春雄さん、気がついたか？」

「……………ここは？」

近藤は辺りを見回した。病院のベッドのようである。

「俺が救急車呼んでやったんだよ。感謝しろよな」

「すまないのである。迷惑をかけたのである」

「無茶しやがって。ほら」

河村がペットボトルを近藤の手に握らせる。

「これは、アクエリアス！」

「そうだよ。好きなもん飲め。俺も悪かった。俺が無理にポカリなんか飲ませようとしなきゃ、こんなことには」

「春雄をポカリ派にすることを、諦めたのか？」

「知ってたのか」

河村が少し驚いている。

「無論。わからぬ春雄ではないのである」

「さすが春雄さんだぜ」

二人は互いに笑い合った。

谷垣は無我夢中がむしやらに走り回っていた。

(逃げるんだ！ とにかく遠くへ！ さもないと、こゝ、殺される！)

「落ちつけよ直人。襲われたくらいで、何だ」

幻聴が冷たく言い放つ。この前聞いた時は家弓家正の声だったが、今は中田譲治の声になっていた。

(何だとは何だ！ 襲われたんだぞ！ おおごとだろうが！)

谷垣は心の中で反論した。

「だが、大したなかつたらう？ 怪我したわけでもなし、何をそんなに慌ててるんだ？ まあいい。それより、その公園のトイレに逃げ込むといい。そうすれば、さっきの奴には見つけれない。しばらく鳴りをひそめ、折を見て帰宅すればいいんだ。簡単だろう？」

(確かだろうな？)

「確かだ。俺は未来が見えると言ったらう？ 俺の言うことを聞い

ていれば、お前は安全だ。ここで生き延び、また面白くもおかしくもない、児童に等しい小説もどきを好きなだけ書ける」

（お前に悪しざまに言われる覚えはない。黙っとけ）

「そうか。しかしお前も物好きだな。最近はお気に入り読者が減っていると騒いでいたが、それがお前が書いた駄作小説、はきだめブログの真実の評価なのだ。現実を受け入れろ」

（黙れってんだよ！ 俺はこのままじゃ終わらない！ 今にきつとお気に入り読者も前のように増やして見せる！ 見とけ！）

谷垣はトイレに入った。個室が二つある。右の個室に入って鍵をかけた。

「大した自信家だ。その自信がどこから湧いてくるのかがわからないが」

「はあ、はあ、はあ……」

佐藤は息を切らせて走っていた。どれくらい走ったのか、自分がどこを走っているのか、掴めていない。とにかく夢中であった。

（どこかに隠れねえと。奴らに見つかったら、何をされるかわかったもんじゃないねえ。お！）

佐藤は公園にたどり着いた。そう言えば、ここは谷垣がよく歩く

散歩コースであることを思い出していた。

(ここにしばらく厄介になるか。まさか便所に隠れてるとは、奴らも思っまい)

右の個室は使用中だ。左の個室で立てこもることにした。

谷垣は何者かの気配を感じ取った。誰かがトイレに入ってきたようだ。

(誰か来た!?)

「この近くの人間だろう。気にするな」

(そうだ。そうだな。何を焦ってるんだ俺は。こついつときはあいつが言った通り、落ち着くしかない)

谷垣は息をひそめて、時間を過ごすことにした。

関根は腫れてきた右目を押さえながら、谷垣を追跡していた。

(谷垣の野郎、どこ行きやがったんだ。ここまできて、取り逃がすとは! 絶対探し出してやる! あいつは八つ裂きにしてやらなきゃ、気がすまない)

いけどもいけども、谷垣の姿はない。右目の痛みも手伝い、関根もいら立ってきた。

「あいつを殺したいか、関根。その思い、俺が叶えてやるっ」

（奴の居場所を知ってるのか！ 教えてくれ！）

「この先に公園がある。その個室でお前をやり過ぎ考えのようだ」

（公園のトイレ！ そんなところに！ ……俺を馬鹿にしがって！ 俺が見つけれられないでも思ったのか！ トイレ！ トイレだと！ 馬鹿にしゃかって！ トイレなんか隠れたってこの俺からは逃れられないぜ、谷垣。俺を甘く見たっけは、高くついたな）

関根は目的の場所へと走った。

すぐに谷垣の隠れ場所は見つかった。

（どっちの個室だ！ 二つとも埋まってる！）

「ああ。左だ、左。左に谷垣はいる」

（サンキュー！）

関根は思い切り個室のドアに蹴りを入れた。ドアが外れる。

「あんだてめえは！」

チンピラ風の男が立っていた。見覚えがある。こいつは谷垣と一緒に谷垣家から出てきた奴だ。

(谷垣じゃない、だと?)

関根は知らず知らず冷や汗を流していた。

第十四章 知る人ぞ知る男、無残

(この声は、佐藤！？ あいつがなぜここに？)

谷垣は個室の中で小さくなった。無意識のうちに、佐藤を恐れる心がそうさせたのだ。

「ん？ 違ったな。すまんすまん。俺のミスだ」

ゼパルがいい加減な口調で謝った。

「さっき家の前に居た乞食じゃねえか。何の用だよ？」

佐藤は関根が右手にナイフを手にしているのを目にとめた。

「おまえ！ 何でそんなもん持つてる！」

「あ、いや、これは」

関根は突然のことで、言葉が続かない。

(ナイフを持った乞食！ あいつだ！ その辺で俺を探し、ここまでやって来たのか！)

谷垣はがたがたと震えだした。谷垣は嫌いなはずの佐藤が乞食を倒してくれることを願う始末であった。

「お前も河村の一味か!? 俺をつけてきたんだな! どこまでもしつこく俺をつけ狙いやがって! 俺が何したって言うんだよ! ざけやがって! やられてたまるか! おらあああああああああああああ!」

佐藤の動きは素早かった。佐藤が放った拳は関根の顔にめり込んだ。

「俺のたまとろうなんて、百年はええぜ! 原江神拳なめんなよ、クソが!」

佐藤の拳は止まらない。関根の腹をえぐる。

「ぶふっ!」

胃液が逆流し、関根が涎を垂らす。

「お前みたいなチビデブの小汚ねえ乞食野郎が本気で俺を殺せると思ってたのか! ざけんなよ。俺はそこまで弱くねえんだよ! おらあああああああああああああ!」

佐藤の飛び蹴りが関根の胸を襲った。

「がつ！」

関根の体は壁に叩きつけられた。倒れこむ関根の腹を、さらに佐藤が蹴りを叩きこむ。

「おらおらおらおら！ 倒れたって、泣いたって、喚いたって、俺は許さねえ！ 俺の命を狙った報いだ！ おらあああああああ
あ！」

(おい……………。はやく……………。俺を、助けてくれ……………)

関根は悪魔に懇願した。

「助ける？ そんな約束、した覚えはないがな」

(……………俺を騙したのか?)

関根の言葉に悪魔は耳を貸さず、

「関根、お前も終わりのようだな。下手すると、ここで死ぬかもな……………二十九か。短く、実に空虚で不毛な、下らない、つまらない人生だったな。まあ、それが二トらしいと言えは、言えなくもないか」

突き放すような口調で言った。

悪魔の声が遠のいていく。関根は意識を失った。

関根の髪を掴み、佐藤が耳元でささやく。

「いいか！ 今度俺の命を狙ってみろ？ こんなんじゃすまねえぞ！」

佐藤が手を離し、トイレから立ち去っていく。

谷垣は生きた心地がしないまま、佐藤の関根に対する暴行を耳で聞いていた。

関根はいなくなったらしい。もう気配を感じない。ほっと息をつく谷垣。

（あいつ本当にキレると何するかわかんない奴だな。こわ。まあ、さすがのあいつも俺をぼこぼこにはできんだろうが）

「何やってる？ 出るなら今のうちだぞ？」

（そ、そうだった！ だが、今出て大丈夫なのか？ あいつが襲ってくるんじゃないか？）

「奴は気絶している。何もできん。だが、時間が立てば意識が戻る可能性も高くなるな。このドアを蹴破ってお前に襲いかかるかもな？ 逃げるなら今しかない。それとも、トイレで殺されたい願望でもあるのか？」

（あるわけないだろ、そんなもん。お、俺は行くぜ。俺は生きるんだ！）

谷垣は意を決して個室から出ることを決めた。

「生きるか。しかし、生きて何になる？ 生き延びたところで、変わり映えのしない、退屈なニート生活が待ってるだけじゃないか。それに何の意味がある？」

(うるさい！ そのうちバイトでも始めるさ)

谷垣は恐る恐るドアを開けた。ほんの数センチだけ。隙間から外を窺う。ぴくりとも動かない関根が目に入る。

「いよいよお前もニート卒業か。しかし、それもフリーターが一人増えるだけの話だな。世界にとってみれば、無に等しい行いだ」

(さっきから何なんだよお前は)

谷垣は出来る限りの力を振るい、猛ダツシュし、関根の前を通り抜けた。

「俺はお前の困ったところが見たいだけなんだ。もっと俺にドラマを見せてくれ。これまで以上に、お前の愚かさを見せて、俺を楽しませてくれ」

(やなことだ。面白い奴なら、俺以外にもいつぱいいるじゃねえか。世界には奇人変人キチガイ、痛い人、電波は溢れてる。どうして俺なんだ？)

「さあな。自分で考えてみたらどうだ？」

谷垣は家に帰るのはあまりにも危険なので、とりあえず、いつも
の散歩道をよく歩くことにした。

第十五章 春雄の決意とアルプス天然水

近藤と河村が談笑していると、勢いよくドアが開き、箕輪が顔を出した。

「先輩！」

近藤が河村を睨みつけた。

「ああ、俺が話したよ。文句あるか？」

「……………余計なことをしてくれたのである。もう起きて平気なのか、箕輪君？」

「私なら全然平気ですよ。問題は先輩ですね。先輩、こんなに暑いんだから、頻繁に水分は補給しなきゃじゃないですか。ゼロさんから聞きましたよ。ポカリが嫌いだからって、せっかく買ってきてくれたのに飲まなかったって。何考えてんですか。ゼロさんに迷惑かけちゃダメじゃないですか」

近藤はしゅんとしている。

「……………面目次第もないのである」

「春雄さん、だっせえなあ」

河村は笑いをこらえるのに忙しい。

「ゼロさんもゼロさんですよ。どうして私に話してくれなかったん

ですか？ 私だけ除け者なんて、あんまりでしょうが！」

「ご、ごめんな。箕輪さんは頭やられたって聞いて、休ましておいた方がいいと思って。春雄さんも黙っとけって言っしさ。すまんかった」

河村は素直に頭を下げた。

気まずい空気が流れた。

沈黙を破ったのは箕輪だった。

「もういいです。それより、先輩はいつ退院ですか？」

「明日には退院できるのである」

「ああ。とにかく今日中は絶対安静らしい」

「それはよかったですね。……いつにしますか？」

「何を？」

河村が首をかしげた。

「廃人無職青年襲撃に決まってるじゃないですか。先輩たち、今日もあいつを取り逃がしたんでしょ？ 早いとこ始末しないと不味いですよ。ほっとけばほっとくほど、あいつのアニメ破壊工作が進行しちゃいます」

「ならば、明日、再度谷垣邸を襲うのである！」

近藤が決然と決意を述べた。

「明日とはまた急だな。病み上がりじゃねえか。やめといた方がいいんじゃないの？」

河村が近藤の身を案じて言った。

「そうですね、先輩。さっきはああ言いましたけど、やっぱり無理しない方が」

箕輪はトーンダウンした。

「箕輪君、君は思い違いをしているようなのである！ これは一刻を争う事態なのである！ 春雄死すとも、アニメは死せず！ 死せる春雄、日本アニメを走らす！ アニメあつての春雄！ 春雄はこの命、アニメに捧ぐのである！」

「いや、先輩の覚悟はわかりましたけど」

「ならば、止めないでくれなのである！ 春雄とアニメは一心同体、運命共同体なのである！」

「ですが」

なおも説得を試みる箕輪。

「まあまあ、もういいじゃねえか、箕輪さん。春雄さんの好きにさせてやれば。こんなに元気なんだし、大丈夫だって。春雄さん、相撲で体鍛えてんだろ？ だいじょぶ、だいじょぶ。今度は俺も気を

利かせて、ポカリじゃなくアクエリ持つてくし」

「あー！」

箕輪が何か思い出し、バッグに手をつっ込んだ。

「どうした？」

「これ、先輩にあげようと思って」

箕輪はペットボトルを取り出し、手渡した。

「はい、どうぞ。飲んで下さい、先輩」

「有り難く受け取るのである。はっ！ これは！」

近藤が驚き、大きく口を開けた。

「な、なんだよ？」

「………アルプス天然水である」

「え？ 嫌いでした？ なんかそれしかなくて。病院の自販機で買ったんですけどね」

「いや、嫌いではないが。むしろ、ポカリよりはましだと春雄は思うが。ただの水に百五十円も払うのはどうかと春雄は考えるのである」

「えー、そうですか。じゃあ、水道水の方がよかったですかね」

「そういう問題でもないのである」

「いいから飲んで下さいよ。せっかく買って来たんですから」

春雄はるアルプス天然水に口をつけた。喉をつたう。

「どうです？」

「………水である」

「当たり前じゃん」

河村が呆れたように言った。

第十六章 ネットでの猛攻

翌日。正午に近藤は退院した。退院に、河村や箕輪が駆け付けた。

「先輩、退院おめでとございます。大事に至らなくて、真面目に良かったです」

「だな。俺の適切かつ迅速な通報の賜物だぜ」

「二人とも、ありがとうなのである。さて、ゼロと箕輪君には、やってもらいたいことがあるのである」

「え？ このまま廃人無職青年の家に行くんじゃないんですか？」

箕輪がぼかんとした顔をしている。

「そうだよ。昨日再度襲撃するって言ってたじゃんか。忘れたのか」

「忘れてはいないのである。作戦変更である。あの家には警報装置がつけられているのである。侵入しても、すぐに警察や警備員が来てしまうのである。外で見張っていても、出てくるかどうかはわからないのである。それならば」

「それなら？」

河村が先を促す。

「外に出るように仕向けることが肝要なのである。そのために、谷垣のブログを荒らし、挑発、外出させるのである。そしてそこを狙

うのである」

「なるほどな。いいんじゃないの」

河村が賛意を示した。

「私も賛成です。家に帰って荒らしコメント書き込めばいいんですよ？」

「そうである。準備ができれば春雄に知らせて欲しいのである。三人同時攻撃を行うのである」

「それでは、諸君の健闘を祈るのである」

近藤が敬礼して見せた。二人も敬礼を返した。

河村は帰宅し、パソコンを起動させ、谷垣のブログにアクセスした。近藤に早速電話する。

「俺だ。今谷垣のブログを見てる。いつでもいいぜ」

「了解である。箕輪君も配置に着いたと連絡があったのである。それでは、戦闘開始なのである！」

近藤が号令を出す。

「オッケー。ゼロ、いっきまーす」

(と言ったものの、どこから攻めたらいいものか、迷うな)

「廃人ニートは小説を書けるか？」の記事数はけっこうな数であった。

「春雄さん、どっからいったらいいのかわかんねえ。なんかアドバイスねえか？」

「うむ。それなら、この男の自称伝説や過去に行った悪事・失言・問題発言を攻撃すればよいのではないだろうか」

「了解。サンキュー」

「廃人無職青年 伝説」は複数あった。ヘタレ伝説、変態伝説、懇願アクセス乞食伝説である。失言・問題発言としては、エヴァつまらん発言、たかがアニメ発言、アニメキャラレイプ期待発言などがあつた。

河村はそれらを批判するコメントを書き込んでいく。読むたびに、谷垣に対して悪い印象をもった。

(こいつはマジで馬鹿な奴だ。しかも開き直っている。どうしようもない)

「大体書き込んだ。次は？」

「お疲れである。それよりもゼロ、春雄のMSNメッセを開いてくれなのである。今箕輪君とチャットしていたところなのである」

「おいおい、そういうことは早く教えてくれよな」

「すまないのである」

河村はメッセを開き、チャットに参加した。

お。ゼロさんこんにちはー。ってさつき会いましたよねw

おう。箕輪さんは何してんだ？

私はこいつの小説叩いてますよ。ほんと叩くところだらけです。ね。台詞ばかりで、こんなの小説じゃないですよw あと、こいつ、なんか削除してる記事があるんですよ。都合の悪いことは証拠隠滅、臭いものには蓋ってわけです。なんで、そこも責め立ててます。それから、アクセスに無茶苦茶拘ってるところも大いに攻撃できるかと。とにかくこいつ、おかしいところだらけです。相当な変人ですよw

そうか。さすが箕輪さんだ。やり手だぜ。俺なんかもう攻めるところないや。箕輪さんも助言頼む。

えー、こいつこんなに馬鹿なのに、もう叩けませんか？
・・・そうですねえ。こいつがニートのところとか、いけるんじゃないですか。

河村は自身もニートであるため、その手は思いつかなかった。そして、あまり熱心にその点を責め立てる気は起きなかった。

箕輪は完全に自分がニートであることを棚に上げていることに気がつかないでいた。

そうだな。そこは忘れてたわ。助かったぜ。

どういたしまして。

（やべえ。ニート攻撃をしなきゃならなくなった。俺もニートなのに。書きづらいぜ。だが、箕輪さんに言われたからなあ。書かないわけにはいかない。うおおおおおおおおおおおおお！）

河村は自分の中の葛藤と闘っていた。近藤や箕輪は知るはずもなかった。二人は黙々と荒らしコメントを書き込んでいた。

第十七章 廃人無職青年の受難

谷垣は昨日、散歩した後、再び原野が勤務する崎岡研究所へ足を運んだ。

「また来たんですか。なんなんですかあなたは。もういい加減にしてくださいよ。私はニートのあなたとは違って、仕事があるんですよ。それにこの前、私のこと呪ってやるとか言ってませんでした？ どういう風の吹きまわしなんですかねえ」

谷垣の顔を見るなりこれだ。

「あのときは動揺しててだな、想ってもいないことを口走ってしまったんだ。すまない」

「そうですか」

原野は鼻で笑った。

「聞いてくれ！ 俺はまた襲われたんだよ！ 今度は乞食にやられた！」

「生きてるじゃないですか」

原野が呆れた顔で言う。

「辛うじて助かったんだよ！」

「そうですかあ。なんか嘘臭いですね。作り話でしょ？」

原野があからさまに疑った目で見つめてきた。

「嘘じゃねえよ！ 本当なんだよ！ 頼む、信じてくれ！ そして俺を助けてくれ！」

「だから警察に行けって言ってるじゃないですか？ 普通そうするでしょ？ 何か間違ってますか？」

「いいからさ、今日はお前んちに泊めてくれ！ 家には帰れないんだよ！」

「嫌です」

きつぱりと原野は否定した。

「俺が殺されてもいいのか！」

谷垣が詰め寄る。

「知りませんよ。二回も襲われて生きてるじゃないですか。どうせ死にませんって」

原野は仕事に戻っていった。

失意の谷垣は自分が知っている限りの場所に行き、時間を潰すことにした。特に目的のない移動である。原宿、渋谷、池袋、新宿……。ただふらふらと徘徊してまわった。その生気の抜けぶりは、まるで生きた屍、人形のようにであった。

ついには行くところがなくなってしまった。また同じ場所に行く気力もない。仕方なしに、家に電話して様子を聞いてみることにした。どうもなければ帰宅するつもりであった。

「もしもし？」

佐藤が不機嫌そうな声で応対してくれた。

「直人です。異常はありませんか？」

「異常だあ？ ここんとこ、おかしいことだらけだろが！ 全部お前の所為なんだよ、このクソガキが！」

電話が切れてしまった。

「異常はないんじゃないのか？ 家に帰れるぞ。よかったな」

またしても幻聴が話しかけてきた。

谷垣は無視した。

とぼとぼと歩いていると、家に着いていた。誰かにまた襲われなにか、びくつくながらの帰路であった。しかし、杞憂であったようで、何事もなく帰宅した。気が重い、鍵を開け、家に入る。

「おう。帰ったか。待ってたぜ」

佐藤が手ぐすね引いて待ち構えていた。

谷垣はすぐに自分の部屋へ連れて行かれた。ドアを閉めるなり、

佐藤が殴りかかってきた。

「おらおらおらおらおらおらおらおらあああああああああ！
鈍い衝撃が腹に伝わってきた。十数発続けざまに殴られた。谷垣は息もできない有様だった。」

「お前の所為で二度もひでえ目に遭わされたんだ。本当なら、こんなもんじゃ済まねえが、これで勘弁してやる」

佐藤は退出した。

佐藤から解放された谷垣はそのままベッドに倒れ込んだ。体が恐ろしく重く、そしてだるい。

谷垣はそのまま眠りに落ちた。

目が覚めた。時計を見ると、十二時半だった。寝過ぎだなと自分でも思った。起きようとしたとき、腹がずきりと痛んだ。昨日佐藤に殴られた箇所が痛むのだ。

何とか起き上がる。すぎずきと痛むが、タオルを持って洗面所へ行き洗顔する。次に歯磨き。味噌汁とご飯の朝食をとる。

「暢気なものだな、直人」

谷垣は相手にしない。

「無視か。そんな態度でいいのか」

思わせぶりな幻聴の言葉が気になった。

(何だよ?)

「お前のブログ、大変なことになってるぞ」

(なに!?)

谷垣は箸を置き、立ち上がる。

「おいおい、行っただってどうにもならん。飯ぐらい、落ち着いて食べ」

谷垣はまっしぐらに自室へ向かい、パソコンを立ち上げた。アメーバブログにログインする。

(!!!!)

谷垣が目にしたもの。それは信じられないほどのコメントの数だった。

「新章に突入、というわけだ」

幻聴が冷静に告げた。

第十八章 コメントによる心理戦

谷垣は恐る恐るコメントを読み始めた。

「愉快的コメントがたくさんついてるぞ。よかったじゃないか」

幻聴が冷やかした。

前科者の癖にブログをもつなよ。反省してんのかお前。そんなお前に、この俺が正義の筆誅を下す！

ハンドルネームは「平成正義仮面」となっていた。

美人だからって、人の顔じろじろ見るなよ。お前常識ねえなあ。普通にキモイぜ。そしてエロい。今度から廃人エロニートと名乗れ。わかったな？

アニメの女性キャラクターのレイプを期待するとか、やつぱお前は犯罪者の性格だ。お前は危険だよ。ちゃんと精神科医に話とけ。

しまいにや、アクセス乞食か。落ちぶれたもんだな。アクセス乞食なんて、みんな嫌いだよ。お前のような奴に、ブログをする資格はない。今すぐ閉鎖しろ。

W杯日本負けるとか、お前何なの？ お前あれだろ？ みんなが一体となって一生懸命になってて、それに自分が入って行けなくて、寂しいんだろ？ 悔しいんだろ？ みつともないぜ。

たかがアニメ？ お前は俺を怒らせた。アニメファンとして、許せん！ 取り消せ！

お前ニートの癖に一人前の口きくなよ。そういうのはな、ちやんと働いてから言うべきものなんだよ。ニートは発言するべからず！

小説の記事には、「超美人」というハンドルネームの人物が何件もコメントをつけていた。

本当、廃人クンの小説はつまらん。つまらな過ぎる、ほんと。どうやったらこんなに下手糞にできるの？ うーん、わかんない。台詞ばかりだしね。描写はどうした、描写は。風景とか全然書いてないよね？ 書けないの？ じゃ、もうやめたら？ そんな小説家、聞いたことないよ。はい、小説家失格。

廃人クンてさ、よく台詞に！つけるよね。何で？ なんかきつぽいよね？ そう思わない？ 何歳だっけ？ 十代じゃないんだよね？ ならさ、もっとちゃんとしようね。読んでてつらいものがあるよ。とにかく、！とか、いらんからw

廃人クン、下手なのを開き直るのはいかんよ。けしからんな。実にけしからん。そういう考えでは、上達せんよ。上達する気ないんだっけか？ うまくなりたくないの？ なんだかねえ。そういう

消極的な性格だから、ニートなんかやっちゃってるんだろっねえ。
駄目だな。駄目駄目だな。

何でさ、廃人クンの小説に出てくるキャラはニートが多いの？
自分がニートだから？　どういう読者を狙ってるの？　やはりニート？　もっとまともな層を狙おうよ。そういうこと考えてる？
ニート活躍させて楽しい？　そうだよねえ、ニートなんて、リアルじゃ何にもできないもんね。廃人クンも社会の何の役にも立っていないよね。だからせめて、小説の中だけでも、活躍させてあげたいよね？　うん、わかるわかる、その気持ち。気持ちはわかるんだけど、やはりリアリティないよね。ニートはあんなに強くないからw

「新撰組局長」というハンドルネームからのコメントも相当数あった。

まったく、あなたは何というおぞましき、邪悪な人間なのだ。私はあなたほどの悪人を知らない。あなたほどいい加減でふざけてばかりで幼稚な人間を、知らない。初めての体験だ。私は生まれて初めて、あなたのような人間がこの世にいることを知った。大いに戦慄し、恐怖した。あなたはとてつもなく異常な人格の持ち主だ。間違いは正されなくてはならない。あなたは即刻、精神科に行き、医師に相談し、その大いに問題のある人格を治療するべきなのだ。

そうだそうだ、局長の言うとおりだぜ。お前は狂ってる。さっさと入院しろ。

そうそう。廃人クンてどうせひきこもりでしょ？ 病院行くついでに、散歩でもしてきたらいいんじゃないの？ 外に出て、人と接して、世間の厳しさを身をもって知るべき。

ヒッキーは外に出とけ。そして世間を知れ。

超美人さんや平成正義仮面さんの仰る通りだ。廃人君は引きこもりなのだから、もっと積極的に外に出なければならぬ。これを読んだらすぐに外出するように。

コメントは他にも多数ついてた。すべて、平成正義仮面、超美人、新撰組局長のものであった。

（なんなんだよ、こいつらは！ いらねえコメントたくさんつけやがって！）

谷垣の頭は完全に沸騰していた。

第十九章 春雄の責任

コメント荒らしにいら立ちを隠しきれない谷垣。追い打ちをかけるように佐藤が姿を見せた。

「お前が家に居るとろくなことねえんだよ。うぜえから、さっさとどっか行け。パソコン何かやってんじゃねえよ、タコ」

佐藤が強引に谷垣を部屋から追い出し、玄関へと連れて行く。

「ほら、出る。遅くまで帰ってこなくていいぜ」

「また奴らに襲われるかも……」

「お前のことなんか知るか。俺はもうどうだっていいんだよ」

佐藤は谷垣を玄関に残し、立ち去っていった。

「コメントは大賑わい、今度は外の空気を吸ってこいとは、これまた随分楽しくなってきたじゃないか、直人。いいことづくめだな」

谷垣は仕方なく靴を履き始めた。

箕輪さん、キャラ変わってんじゃん。

そうですね。リアルと同じじゃつまらないじゃないですか。ネットにはネット、リアルにはリアルの顔があるんですよ。

春雄さんは口調が違うな。語尾に「である」「つけねえの？

春雄は馬鹿ではないのである。であめなどつけたら、すぐに春雄だとばれてしまうのである。

確かにな。

ふと河村は重大な疑問が思い立った。

春雄さん、俺たちみんな家でパソコンしてんだぜ？ 谷垣が

外出したとして、どうやって奴を襲うんだ？

あ！ そろいですよ。どうすんですか、先輩？

フフフフフフフフフフ。実は春雄は今、春雄の家からネ
ットに接続しているわけではないのである。

どういこうったよ、それは。

春雄は今、谷垣家の前に止めた車の中にいるのである。

何だって！

ええええええ！

河村も箕輪も大いに驚いた。

一人でやるつもりなのか？

その通りである。もともとこれは春雄言いだしたことが片をつけるのが、筋というものである。春雄

そんな！ 水臭いですよ、先輩！

一春雄は二度もしくじってしまったのである。すべては春雄の失態、春雄が責任をとらなければならぬのである。自分で蒔いた種は、自分で刈り取るべきなのである。

— 最初の時は私だっていたじゃないですか

— 箕輪君を痛い目に遭わせてしまったのは、春雄の責任なのである。

— 二度目は俺も一緒だったろ？ 谷垣を逃がしたのは、俺のミスでもあるんだぜ？

— いや、春雄が悪いのである。

— 何でも自分で背負い込まないで下さいよ。

— そうだよ。

— 谷垣が出てきたのである。春雄は行くのである。後でまた連絡するのである。それでは春雄は落ちるのである。この問題の決着をつけるのである。また会おうなのである。

— 待てよ春雄さん！

— 先輩！

春雄からの返信は途絶えた。

— 俺、今から谷垣邸に行くよ。

—私も。

谷垣は数歩歩いてすぐ、

「谷垣直人！」

と呼びとめられた。嫌な予感がしたが、とにかく振り返る。そこには、「俺はゼロ様」と名乗った眼鏡男が立っていた。

「はおおおおおおおおおおお！」

眼鏡男は谷垣に向かってきた。

「いよいよお前の人生も最終章に行きついたというわけだ、直人」

幻聴が縁起でもないことを言ってきた。

第二十章 世界二一ト帝国初代皇帝の誕生

谷垣は眼鏡男の突進を見るや否や、身を翻し、脱兎のごとく逃走を図った。

「逃がすか！ 三度目の正直なのである！」

眼鏡男が叫び、地面を蹴った。眼鏡男の飛び蹴りが綺麗に谷垣の背中に入った。

「ぐおっ！」

谷垣はつんのめって転倒、顔をぶつけた。鼻血が滴り落ちた。

眼鏡男が谷垣の肩を掴み、自分の方に顔を向かせた。

「どすこいである！」

張り手が顔に飛んできた。

「俺が何をしたって言うんだ！ 俺に何か恨みでもあるのか！」

「しらばっくれても無駄なのである！ 貴様は原石慎太郎が放った破壊作業員であり、日本の漫画とアニメを滅ぼそうと日夜工作に勤しんでいることは既に露見しているのである！」

「何のことだよー！」

「どすどすどすどすどすどすどすどすどすどすどすどすどすこいである

！」

凄まじい連続張り手攻撃が谷垣を襲った。谷垣は気絶してしまっ
た。

谷垣が失神したのを確認すると、眼鏡男は呟いた。

「終わったのである。これですべて。片をつけることには成功した
のである。ゼロと箕輪君に報告しなければなのである」

眼鏡男は車へと急いだ。

「あつけない幕切れだな。直人らしいと言えはらしいが。しかし、
俺はそれでもつまらんだ。これでは物足りんな。もっと楽しませ
てほしいものだ」

近藤の耳に、突如第三者の声が聞こえてきた。

「なに！ 誰なのである！」

近藤が振り返るが、倒れている谷垣がいるだけだ。

（誰もいないのである。今の声はいつたい？）

「近藤春雄、お前などには俺の姿は見えんよ。お前もこれでおしま
いでは退屈だろう？ 俺がもっと面白くしてやるう。……
谷垣直人、お前に力を授けてやるう。思う存分に暴れるがいい」

突然、谷垣の目が見開かれた。

「！
」

近藤が唖然としている。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおお！ 力が
！ 体中に力が！ 今まで体験したこともない力が、俺の体を駆け
廻っている！」

「そうだ。俺がお前に力を与えたのだ。もはやお前は無敵、お前の
望みで叶わないことはない。試しに空を飛んでみたらどうだ？」

谷垣が空を飛べと思うと、谷垣の体は空中浮遊した。

「ば、ばかな！ 空を飛べるだど！」

近藤は驚きの連続であった。

「直人、気分はどうだ？」

「最高だ。このうえもなくいい気分だ。お前に感謝する」

「お前は力を手に入れた。その力で、この星を支配するといい」

「それはいいかもな。谷垣帝国でも作るか。……。い
や、それではあまりにありきたりすぎてつまらないな。……。い
世界帝国。……。世界二ト帝国！ これだ！ 俺は世界二
ト帝国初代皇帝となるのだ！ フハハハハハハハハハハハハ

「ハハ！」

「それもいいだろう。しかし、皇帝ともなると、容姿に優れていなければな。今のお前では、厳しいかもな。容姿を変えた方がいいぞ。お前が思う理想の容姿にな」

「そうだな。………それなら、『黒執事』のセバスチャンになってみよう」

『黒執事』は枢やなが描く、パラレルワールドの十九世紀英国を舞台とした、アクションコメディ何でもありの執事漫画である。セバスチャンは主人公の名前だった。

谷垣の容姿がみるみる変化した。髪はさらさらで光沢を放ち、真ん中分けとなり、小太り気味の腹はひっこんだ。怪しい色気を発する美青年が誕生した。

「ば、ばかな！　こんなことがあるはずが！」

近藤はまたまた驚き、完全に我を失っていた。

「どうだ、近藤とやら？　朕が羨ましいか？　そうであろう。フハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

谷垣は喋り方までもが変わってしまった。

「た、確かに、羨ましいのである！　しかし、こんなことは反則なのである！　世界二ト帝国？　貴様は皇帝の器などではないのである！　馬鹿な真似は今すぐやめるのである！」

「嫌だな。お前の言うことなど聞かぬ。止めたいのなら、朕を止めてみるとよからう」

「降りてこいなのである!」

「なぜお前と同じ土俵で戦わねばならぬ? 馬鹿馬鹿しいのう。ほれ」

谷垣が近藤を指差した。指から強い突風が巻き起こり、近藤を襲った。

「うぬ!」

近藤は十数メートル吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。近藤は動かなくなった。

「なんと、一撃とはな。造作もない。朕はこのような弱者に張り手を食わされていたのか。馬鹿馬鹿しい限りじゃ」

「その通りだ。だが、まあ、気にするな。お前はもうかつてのお前ではない。さあ、気を取り直して、世界征服といこうじゃないか」

「ふむ。まずはどうすればよい?」

「何はともあれ、演説だろう。電波ジャックし、テレビやネットで世界二一ト帝国の建国と皇帝即位を訴えるのだ」

「ならば、参ろうかの」

谷垣は谷垣家前から飛び立っていった。

第二十一章 「全世界の二一トに告ぐ」

「どこへ向かっている？」

「テレビ局に」

「そんな必要はない。ここからでも電波ジャックは可能だ」

「そうなのか？」

「念じるのだ」

谷垣は言われた通り念じてみた。谷垣の脳裏にテレビ画面に映し出された自分が映った。

「全世界のテレビ局をハックした。さあ、演説だ」

「地球の民よ、心して聞け。朕は……………」

（谷垣直人のままでいいんだろうか？）

「ありふれた名前だな。この際だ、改名した方がよいらろう」

（しかし、よいものが思いつかない……………）

谷垣は思いもがけないことで躓き始めた。

「お前の今の容姿は、何をイメージしたものだっただんだけ？ 思い出せ」

（『黒執事』のセバスチャン・．．．．．。そうか！ セバスチャン小野大輔・．．．．．。いや、セバスチャン大輔・．．．．．。セバ大輔・．．．．．。瀬羽大輔！ これだ！ 俺の新しい名は、瀬羽大輔だ！）

「朕の名は瀬羽大輔。世界ニート帝国初代皇帝である。朕はここにニートのニートによるニートのための世界帝国建国を宣言する。これは建国宣言並びに皇帝即位宣言である。．．．．．全世界のニートに告ぐ。ニートは今まで、社会からの迫害や偏見、蔑視に耐えてきた。それはニートであるがゆえの、回避できぬ試練であった。我々ニートは社会の最底辺に位置し、その地位に甘んじてきた。唯々諾々と社会からの差別を受けなければならなかった。そしてそれはニートである以上、ずっと続くものと思われた。しかし、それが間違っていることを、朕が証明する。今日より、世界史は、人類史は、地球史は塗り替えられる。地球上のニートの歴史も変貌を遂げる。万国のニートよ、団結せよ！ もう耐え忍ぶ時期は終わりを告げたのだ！ ニートよ、武器をとり、戦え！ 社会が我々を否定するならば、逆に社会を否定してやるのだ！ 新しい社会を作ればよいだけなのだ！ ニートはもはや被差別者ではない！ もはや社会のお荷物ではない！ もう有り余る時間をアニメやゲームや漫画や同人誌で潰す必要もないのだ！ 我々ニートは決起し、国を建てるのだ！ ニートのためだけの帝国！ それこそが世界ニート帝国なのだ！ 国籍はニートであるなら、誰にでも与える！ 朕とともに新たな歴史を紡ぐのではないか！ まず手始めに、朕の親衛隊である近衛師団を創設する。午後一時半、日本武道館にて結団式を執り行う。朕は待っている。入団希望者は遠慮なく参加してもらいたい以上だ」

「演説は大成功だな。これでたくさん親衛隊員が生まれる」

「フハハハハハハハハハハハハハハハハ！ ついに！ ついに朕の時代がやってきたのだ！ 俺はこのまま冴えないニート生活を送り、生活に窮したらフリーター生活を余儀なくされるのだとばかり思っていたが、違ったようだ。俺は力を手に入れたのだ！ それこそ絶大な、絶対的な、強大な力を！ これさえあれば、何だってできる！ フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「建国後は何をするつもりだ？」

「そつだな。俺だけが楽しめるアニメや漫画、ゲームを大量に作らせよう。俺の写真集も販売しよう。詩集もいいな。当然、小説も文庫化だ。写真集・詩集・小説は法律で国民に強制的に買って読むように義務付ける」

「いたれりつくせりだな。瀬羽大輔の天下じゃないか」

「俺は今までの人生が惨め過ぎた。今から俺は俺の人生を取り戻すのだ」

「けっこうなことだ。…………そろそろ武道館に行かないか。場所取りといこう」

「ああ」

「何もわざわざ飛んでいくことはないぞ。武道館をイメージし、瞬間移動すればいいのだ。やってみる」

瀬羽大輔は武道館をイメージした。瀬羽の姿は消えた。瞬間移動したのである。

河村は走っていた。目指すは谷垣家。

「ゼロさん！」

箕輪が河村の後を走っていた。

「飛ばしていくぜ！」

「了解です！」

道端に倒れこんでいる近藤を二人は発見した。

「春雄さん！」

「先輩！」

二人は近藤の近くに座りこんだ。河村が近藤の頬を叩く。

「う、うつつうつつ……」

近藤がうめき声を上げる。意識が戻ったようだ。

「何があっただ、春雄さん！」

「谷垣にやられたのである。……奴は空を飛び、指から風を引き起こし、春雄を吹き飛ばしたのである」

「そんな馬鹿なことが……。あいつはエスパーかよ」

河村は半信半疑である。

「いや、近藤が言っていることは本当だぜ」

聞き覚えのある声。

「……岩崎文太か！」

岩崎文太は右翼ニートテロリストで、政治家大量虐殺テロを敢行し、自殺した人物であった。

「覚えててくれてありがとな。そうだよ、俺だよ俺。俺はしっかり近藤が谷垣にやられるとこをこの目でばっちり見たぜ」

「いったいどういうことなんだ？ あいつは何の変哲もない、しがない冴えない、駄目ニートのはずなのに……」

「悪魔だよ。ゼパルという悪魔が奴に力を与えたんだ。それであいつは超人・魔人の仲間入りというわけさ」

「そんなことがありえるんですか？」

箕輪もにわかには信じられない。

「俺がこうしてお前らと話しているのも、俺がサタンの眷属だからだよ。……そんなことより、聞いてくれ。奴は今さっき電波ジャックをして、世界ニート帝国建国宣言と皇帝即位背言を全世

界に向けて行った。奴は世界ニート帝国というものを建国し、自分がその初代皇帝に収まるつもりでいやがる。皇帝になったら好き勝手して遊んで暮らすつもりなんだよ。俺はそんなの気に食わねえんだ。ニートはみんな、独立自尊、皇帝とかそんなもん、要らねえはずなんだ。しかもあいつには理想はない。ただ大将になりたいだけなんだ。つくづく下らねえ。あんな奴に国を作らせちゃ駄目だ。お前ら善良で正義感に溢れたニートがダークニート谷垣を止めるんだ。俺もバックアップする。奴はこれから親衛隊結団式を日本武道館で開くつもりだ」

「わ、わかった。俺たちが谷垣を止めてやるぜ」

河村、近藤、箕輪はそれぞれ頷いた。

第二十二章 一万人の二ト奴隷

瀬羽大輔は日本武道館に現れた。空を漂っている。

「さすがにまだ誰も来ておらんようだな」

「そうでもないぜ、谷垣直人、いや、瀬羽大輔！」

「何者！」

瀬羽は声の主を見つめた。三人の男女の姿が瀬羽の目に入った。

「貴様は『俺はゼロ様』こと河村英樹、それに近藤春雄に、箕輪晴子か。そろいもそろって二トばかり。貴様らも朕がこれから築く帝国に入りたくなつたのか？」

「馬鹿言っんじゃねえよ！ 俺はお前の馬鹿な野望を打ち砕くためにやってきたのさ」

「打ち砕くだと？ これはまた大きく出たな。貴様らは超能力者か何かなのか？ 否。そうではない。所詮ただの人間に過ぎぬ貴様ら如きに、朕が倒せるものか。……貴様らを倒す前に、まずはショータイムだ」

瀬羽が指を鳴らす。突然、男が出現した。

「な、なんだここは！？ 俺は家に居たはずだ」

佐藤清であった。

「佐藤、貴様はよくも朕を何度も何度も殴りまくってくれたな。今その礼をしてやるぞ！」

瀬羽が手を突き出すと、風が舞い、佐藤の体を持ち上げた。

「う、うおああああああああああ！何がどうなってんだ！」

佐藤は座席に激突し、ぴくりともしなくなった。

「さて、次だ」

今度は病院で病人が着る服のようなものを着た男が現れた。関根哲夫であった。

「！なに！何が起こった！」

「関根哲夫。貴様はあろうことか朕を二度も襲った。その罪、万死に値する！」

関根の体も宙を舞った。床に叩きつけられ、気絶した。

「まだまだ」

ワイシャツにネクタイをした若い男が登場した。

「え？」

原野伸介だ。

「原野伸介、貴様は助けを請う私を二度も見捨てた。許しがたい」

「あんだ誰ですか？ あ！」

原野も風に飛ばされ、地面にぶつかり、気を失った。

「お前、そんなことして楽しいかよ！」

河村が怒りに燃え、大声で怒鳴った。

「ああ、楽しい。実にな。屑どもを始末するのは楽しくてしょうがない。今度は貴様らの番だ。だが、朕自ら手を下すのでは、面白みに欠ける。ここは親衛隊の諸君に始末してもらおうとしよう。出でよ、近衛師団！」

瀬羽が号令を下すと、途端に武道館がひとでいっぱいとなった。

「あれ？ あれれれれれれれれ！ どうなってんの？」

「俺は家でエロゲーやってたはずなのに。なぜここに？」

「僕は2chをやってた」

「漏れはニコ動見てた」

「ニコどどど？ 何が何やら」

「なにこれ？ 超能力？」

「おーい、どういことだよ、誰か説明しろ」

瀬羽の力によって一万人のニートが集められたのだ。

「ニート諸君！ 諸君を朕は待つていた！ 世界ニート帝国建国者・初代皇帝の瀬羽大輔である。諸君には、栄えある近衛師団になってもらいたい。喜べ。諸君は選ばれたのだ」

瀬羽の声に、一同沈黙した。しかし、すぐに静寂は破られた。

「はあ？ 近衛師団？ 世界ニート帝国？ こいつ何言ってるの？ つうか誰？」

「真性キチガイ登場。誰か精神病院連れてってやって」

「あいつ見るよ！ 空飛んでるぜ！」

「どうせトリックだよ、トリック。もちつけ」

「何が帝国だよ。笑わせんな。お前なんか皇帝だって認めねえぞ」

「そつだそつだ。皇帝なんかやめちまえ。というか、ニート帝国なんか要らん。俺は入らない」

「何でもいいから、エロゲーの続きやらせろ！」

「2ch！ 2ch！」

「ニコ動！ ニコ動！」

「帰れ！ 帰れ！」

ついには帰れコールまで繰り返した。

「な、なぜだ！？ 朕はお前たちの味方、というのに！？ 朕を裏切るのか！？」

瀬羽の顔が青ざめた。

「裏切るも何も、お前のこと知らんし。ほんとこいつ誰？ なにやつてる奴？」

「知らんよ。そんなのどうでもいいから、早く帰らせる」

「帰らせるー！ そしてお前は引っこめー！」

「き、貴様ら！」

瀬羽が歯ぎしりし、右の拳を力いっぱい握りしめた。

「いらいらするな、瀬羽。お前力あるんだからさ、こいつらなんか乗っ取ってしまえばいいのだ。そうだろ？」

「その手があったか！ フ、フフフフ、フハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「おい、なんかあいつ、笑いだしたぜ？」

「とうとう壊れたか」

「いや、元からじゃね？」

「瀬羽大輔が命じる！ 貴様らは、朕の奴隸となれ！」

瀬羽からまばゆいばかりの光が溢れ出し、武道館を覆い尽くした。

「はい、皇帝陛下。我々は陛下の奴隸でございます」

一万人のニートたちが一斉に言った。

「なんて野郎だ、谷垣、てめえ！」

河村の怒りの炎はさらに燃え上がった。

最終章 廃人無職青年成敗

「命令だ！ この三人を殺せ！」

「はい、皇帝陛下」

ニートたちが一斉に動き出す。河村たちに周囲のニートたちが襲いかかって来た。

「はいやあたたたたたほわちやあちよー！」

河村が必殺拳を送り、ひとりのニートを倒した。

「どすこいである！」

近藤も張り手を繰り出す。

「めーん！」

箕輪は竹刀を振る。

「って、いくらなんでも、一万対三じゃ勝ち目ないですよ！ というか、ゼロさんて河村英樹って名前で、しかもニートだったんですね。まさかうちらとニート友だったとは」

箕輪が悲鳴を上げつつ、河村を興味深げにしげしげと見つめた。

「俺もびっくりだよ。春雄さんや箕輪さんもニートだったなんてな」

「うむ。道理で仲が良かったのである」

「暢気に喋ってる場合じゃないですよ。どうすんですか！」

三人が話している間にも、わらわらとニートたちは襲い来る。三人は輪を作り、防戦していた。

「俺を忘れるなよ。バックアップするって言ったろ？俺が力を貸してやるぜ！」

河村の服装が様変わりした。Tシャツに短パンだったのが、ゼ口服へと変わっていた。腰の剣もプラスチックのそれではなく、西洋の剣になっていた。それだけでなく、とてもつない力が河村に湧き上がってきた。

「うおおおおおおおおおおお！これはラジカセ以上だぜ！この剣はなんだ？」

「それはエクスカリバー、オリハルコンで作った聖剣だ。強力な風で敵を攻撃することができる。今だけお前に貸しといてやるよ」

「うおおおおおおおおおおお！これでも食らえ！」

河村がエクスカリバーを一振りすると、竜巻の様な風が巻き起り、ニートを軽く数百人吹き飛ばした。

「何！　　なんだあれは！　　あの剣は何なんだ！」

瀬羽は動揺を隠しきれない。

「ちょっとそれ凄く使えるじゃないですか！ ゼロさんばかりずるいですよ！ 私にも貸して下さい！」

「悪いな、これは俺専用だぜ。うおおおおおおおおおおおおお
おおお！」

河村はエクスカリバーを振りまくった。そのたびにニートたちが多数飛ばされ、次第に数を減らしていく。

「おのれ河村英樹！ 許さんぞ！ 俺自ら息の根止めてやる！ ふほおおおおおおおおおおお！」

瀬羽が右手を突き出し、河村目掛けて風を送り出す。

「河村、瀬羽が風で攻撃してきた。こっちもエクスカリバーで風を起こし、対抗するんだ」

「わかった。うおおおおおおおおおおお！」

河村も瀬羽の方角を狙ってエクスカリバーを振るった。

二つの風は激突し、四散した。

「く！ ならばこれはどうだ！ ふほおおおおおおおおお
おおおお！」

今度は瀬羽は両手を突き出した。両手から風が巻き起こる。

「河村、飛べ！ 飛ぶんだ！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

河村は自分の足元にエクスカリバーを振るい、風を起こし、空を飛んだ。

「なに！　なんて技だ！」

河村は瀬羽が起こした風に向かっていく。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！」

エクスカリバーを振り下ろす。瀬羽が作り出した風は二つに割れた。

「なんだとお！」

瀬羽は目を見張った。信じられない展開であった。

河村は瀬羽にどんどん接近してきた。

「来るな！　来るんじゃない！」

瀬羽はひっきりなしに河村に風を送ったが、河村は悉くエクスカリバーで切断した。

河村が目前に迫って来た。瀬羽の顔が恐怖に歪んだ。

「谷垣——————！！　二トにも下もねえ！　二

「トに主従関係なんてあつちやいけねえんだ！ お前はそんなこと
もわからないのか！ お前はニートとして、人間として、失格だ！
天誅—————！ これがお前への俺の、俺たちの、
成敗だ—————！」

河村は瀬羽の胸を抜いた。

「この俺が！ 世界ニート帝国建国者・初代皇帝の俺が！ たかが
ただのニートなどに倒される！？ 俺の写真集・詩集・小説の野望
が！ 悪魔、何とかしてくれ！ お前の力ならなんとかなるはずだ
！ またニートに逆戻りは嫌だ！ またブログのアクセスに一喜一
憂する生活を送らなければならないのか！ 頼む、助けてくれ！」

「知らんな。やれやれ、魔王陛下の眷属とはいえ、元人間に俺の楽
しみを邪魔されるとはな。……直人、有頂天になってたお
前は見ていて面白かったぞ。じゃうあな。後は自分で何とかしろ。
気が向いたらまた話しかけてやる」

「ま、待て！」

みるみる瀬羽は地面へと落ちていく。

「う、うあああああああああああああああああ！」

瀬羽は地面に落下した。落下の衝撃で瀬羽は気を失った。瀬羽は
谷垣直人に戻ってしまっていた。

「あいつ、どうしますか？」

箕輪が河村と近藤に聞いた。

「もう、いいんじゃない？ あいつは十分罰を受けてるはずだ。十分すぎるほどにな」

「同感なのである。！ ゼロ、元の姿に戻っているのである！」

河村のゼロ服もエクスカリバーも消えてしまっていた。

「あ！ほんとだ！」

「返してもらったよ。みんな、よくやってくれた。これで二ートの平和は保たれた。元二トとして、俺も大満足だ。それじゃ、また」

それきり岩崎の声は聞こえなくなった。

「また助けてもらったな」

「ええ。あの人、大量虐殺右翼二トテロリストだけど、いい人なのかも」

「うむ。何はともあれ、一件落着である。……………それでは、マックにでも食べに行くか？」

「いいですね。行きましょう」

三人は並んで歩きだした。

「いててて。なんだってんだよ、まったく」

佐藤は起き上がり、辺りを見渡す。

「なんかいつぱいいるなあ。さっきは全然いなかったのに。わけわかんねえ」

「いつてー。何で俺がこんな目に。マジいてー。俺は病人なんだよ、たく」

病室から抜け出して来たような男が佐藤の目に飛び込んできた。

「あ！ お前、あのときの乞食！」

「！ やべー！」

関根は一目散に逃げ出した。佐藤も後を追った。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0560m/>

『廃人無職青年成敗物語』

2011年10月6日16時31分発行